

袖ヶ浦市根岸根遺跡

—一般県道長浦上総線県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書—

平成12年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

そで　が　うら　ね　ぎし　ね

袖ヶ浦市根岸根遺跡

——一般県道長浦上総線県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第381集として、一般県道長浦上総線県単道路改良事業に伴って実施した袖ヶ浦市根岸根遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代の住居跡や古代の建物跡が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人千葉県文化財センター

理事長 中村好成

凡　　例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般県道長浦上総線県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県袖ヶ浦市下根岸字川崎209-1ほかに所在する根岸根遺跡（遺跡コード229-022）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査部長 西山太郎（平成9年度）、沼澤 豊（平成11年度）、南部調査事務所長 高田 博の指導のもと、下記の職員が実施した。

発掘調査 平成9年7月1日～平成9年9月30日 副所長 野口行雄

平成11年9月1日～平成11年9月16日 技師 城田義友

整理作業 平成11年9月1日～平成11年9月30日 技師 黒澤 崇

平成11年10月1日～平成11年11月15日 主任技師 豊田秀治

- 5 本書の編集・執筆は、主任技師 豊田秀治が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、袖ヶ浦市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「上総横田」(NI-54-19-16-4)
 - 第2図 袖ヶ浦市役所発行 1/2,500都市計画図「№41」「№42」
なお、第5図は国土地理院発行 1/25,000土地条件図「姉崎」をもとに作成したものである。
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方針は、すべて座標北である。

本文目次

Iはじめに.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査の方法.....	1
3 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	6
II検出した遺構と遺物.....	11
1 概要.....	11
2 遺構と遺物.....	11
(1)堅穴住居跡と遺物	11
(2)掘立柱建物跡と遺物	23
(3)溝状遺構と遺物	26
(4)土坑と遺物	35
(5)遺構外出土土器	36
IIIまとめ.....	37
報告書抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 調査区の位置と周辺地形.....	2	第18図 012号跡実測図・出土遺物	21
第2図 A地区調査範囲と大グリッド.....	3	第19図 013号跡実測図・出土遺物	22
第3図 小グリッド設定.....	4	第20図 017号跡実測図・出土遺物	23
第4図 A区遺構配置図.....	4	第21図 020・021・022・023号跡実測図.....	24
第5図 B区・C区トレチ配置図.....	5	第22図 020・021・023号跡出土遺物	25
第6図 根岸根遺跡周辺地形分類図.....	7	第23図 001・007号跡実測図.....	27
第7図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	8	第24図 001号跡出土遺物	28
第8図 基本層序.....	11	第25図 005号跡実測図・出土遺物	29
第9図 002号跡実測図・出土遺物	12	第26図 009号跡実測図・出土遺物	30
第10図 003号跡実測図	13	第27図 010号跡実測図・出土遺物	31
第11図 004号跡実測図	15	第28図 011号跡実測図・出土遺物	32
第12図 004号跡出土遺物(1).....	16	第29図 015・016号跡実測図・出土遺物.....	33
第13図 004号跡出土遺物(2).....	17	第30図 018号跡実測図	34
第14図 004号跡出土遺物(3).....	18	第31図 024号跡実測図・出土遺物	34
第15図 006号跡実測図・出土遺物	19	第32図 019号跡・小ピット実測図・出土遺物	35
第16図 008号跡実測図・出土遺物(1).....	20	第33図 遺構外出土遺物.....	36
第17図 008号跡出土遺物(2).....	21		

図版目次

- | | |
|---|--------------------------|
| 図版 1 根岸根遺跡周辺航空写真 | 図版 6 009号跡, 010号跡, 011号跡 |
| 図版 2 002号跡, 003号跡, 004号跡 | 図版 7 出土遺物（1） |
| 図版 3 004号跡, 006号跡, 008号跡 | 図版 8 出土遺物（2） |
| 図版 4 012号跡, 013号跡, 017号跡 | 図版 9 出土遺物（3） |
| 図版 5 020・021・022・023号跡,
001・007号跡, 005号跡 | |

I はじめに

1 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、交通量の増加に伴う、一般県道長浦上総線の拡幅工事の決定に伴い、事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無について、千葉県教育委員会に照会した結果、当該事業地内には埋蔵文化財が所在することが判明した。その取扱いについて協議した結果、事業計画の変更是困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

根岸根遺跡については、平成9年度及び平成11年度に発掘調査を実施し、調査終了後に引き続き整理作業を実施した。平成9年度は、調査対象範囲5,181m²のうち200m²の上層確認調査を実施したところ、竪穴住居跡や溝状遺構が検出されたため、それらの分布範囲800m²について本調査を実施した。また、平成11年度は、平成9年度の本調査範囲に隣接し、連続する遺構の存在が予想されるため上層確認調査を行わず、対象範囲165m²については本調査を実施した。

発掘調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡7軒・溝状遺構2条、奈良・平安時代の掘立柱建物跡2棟、中世の溝6条が検出され、遺物としては、古墳時代から奈良・平安時代にかけての土師器・須恵器、獸骨、鉄滓、羽口、中世陶器が検出された。

2 調査の方法

各年度とも、道路拡幅部分のみの調査であるため、調査区はいずれも細長いものであった。従って、確認調査時においては、調査範囲の長軸方向に沿った形で任意のトレンチを設定した。そして、基準杭を利用して、国家座標系に基づく位置を確認した。また、トレンチの設定に際しては、調査区が交通量の多い現有道路に隣接することから、道路舗装部分から一定の幅を持たせるなど慎重を期した。

平成9年度の確認調査においては、調査対象範囲5,181m²のうち確認トレンチの設定できる部分3か所を選び、南からA区・B区・C区として調査を実施した。その結果、A区においては、区域全体に遺構が存在し、遺物も多く出土しているため全域本調査の必要があると判断した。但し現道部分については、遺構検出面が浅く、遺構自体の掘込みも浅いことから、現道建設時に削平されていると考えられるため、本調査の必要ないと判断した。

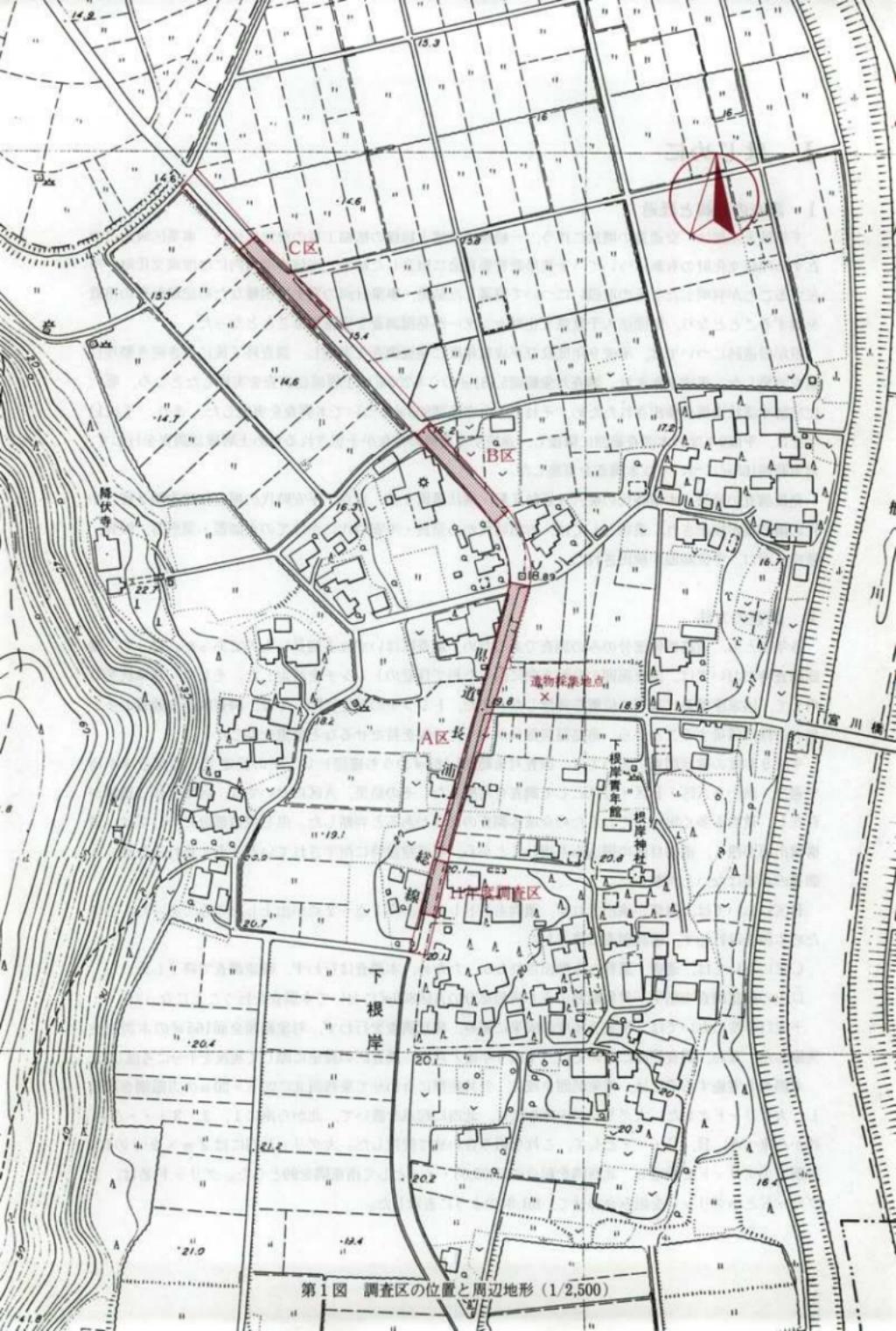
B区においては、遺構が検出されず、遺物も各トレンチから1点～2点が出土したのみであった。このため本調査は行わず、確認調査で終了した。

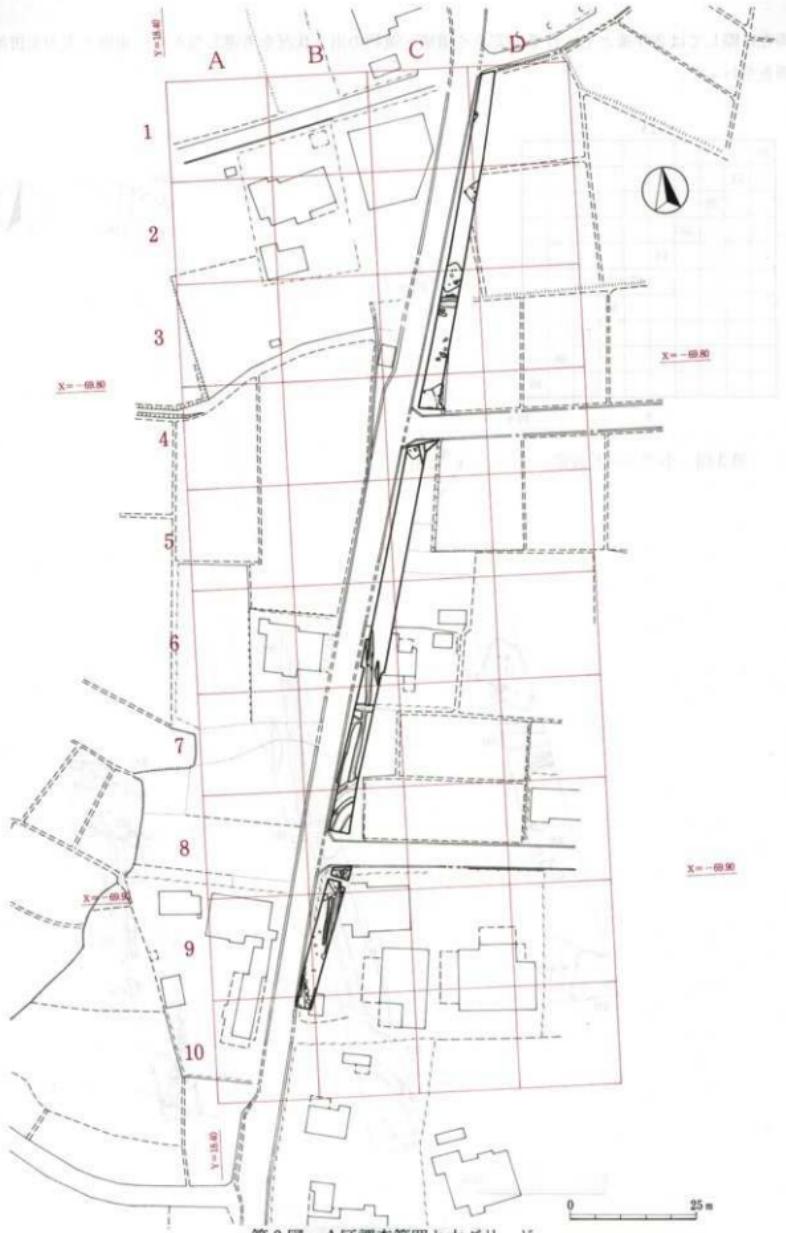
C区においては、遺構・遺物とも検出されなかったため、本調査は行わず、確認調査で終了した。

以上の確認調査の結果、対象範囲のうち南側部分のA区800m²において本調査を行うことになった。

平成11年度においては、平成9年度の成果に鑑み、確認調査を行わず、対象範囲全面165m²の本調査を実施した。なお、調査範囲においては、平成9年度と同様、調査区の設定に際して現況を十分に考慮した。

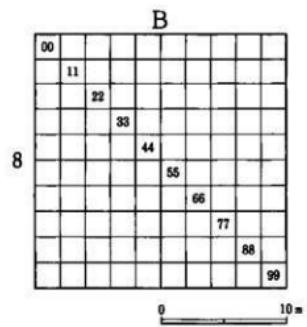
本調査を実施する際には、対象範囲全域に、公共座標に合わせて東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1、2、3…とし、西から東へA、B、C…として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内には2m×2mの100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に01,02,03…として南東隅を99とした。グリッド名は、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、8B-34のように表示した。



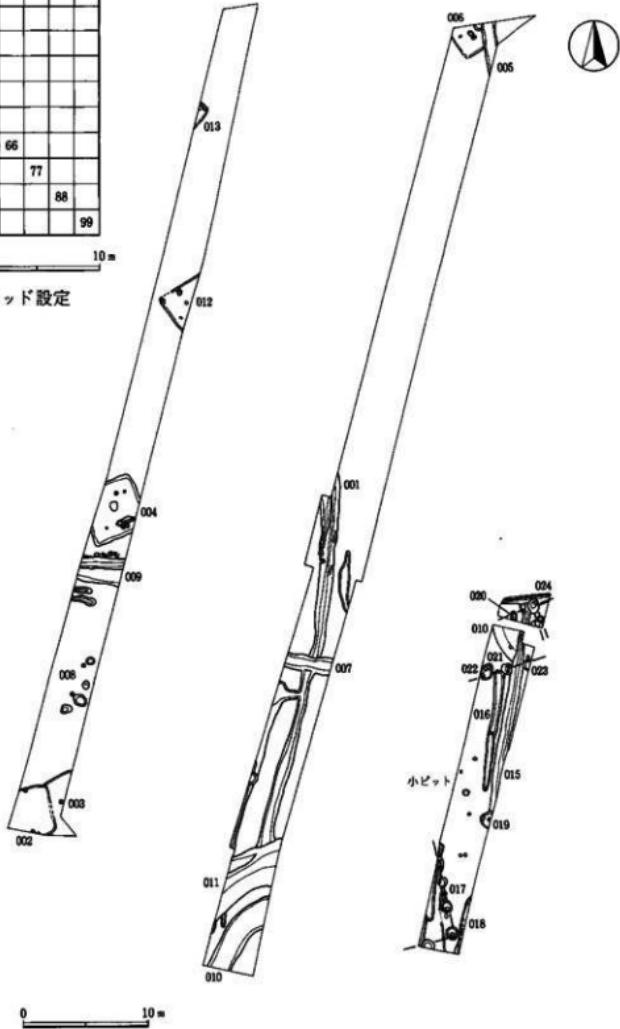


第2図 A区調査範囲と大グリッド

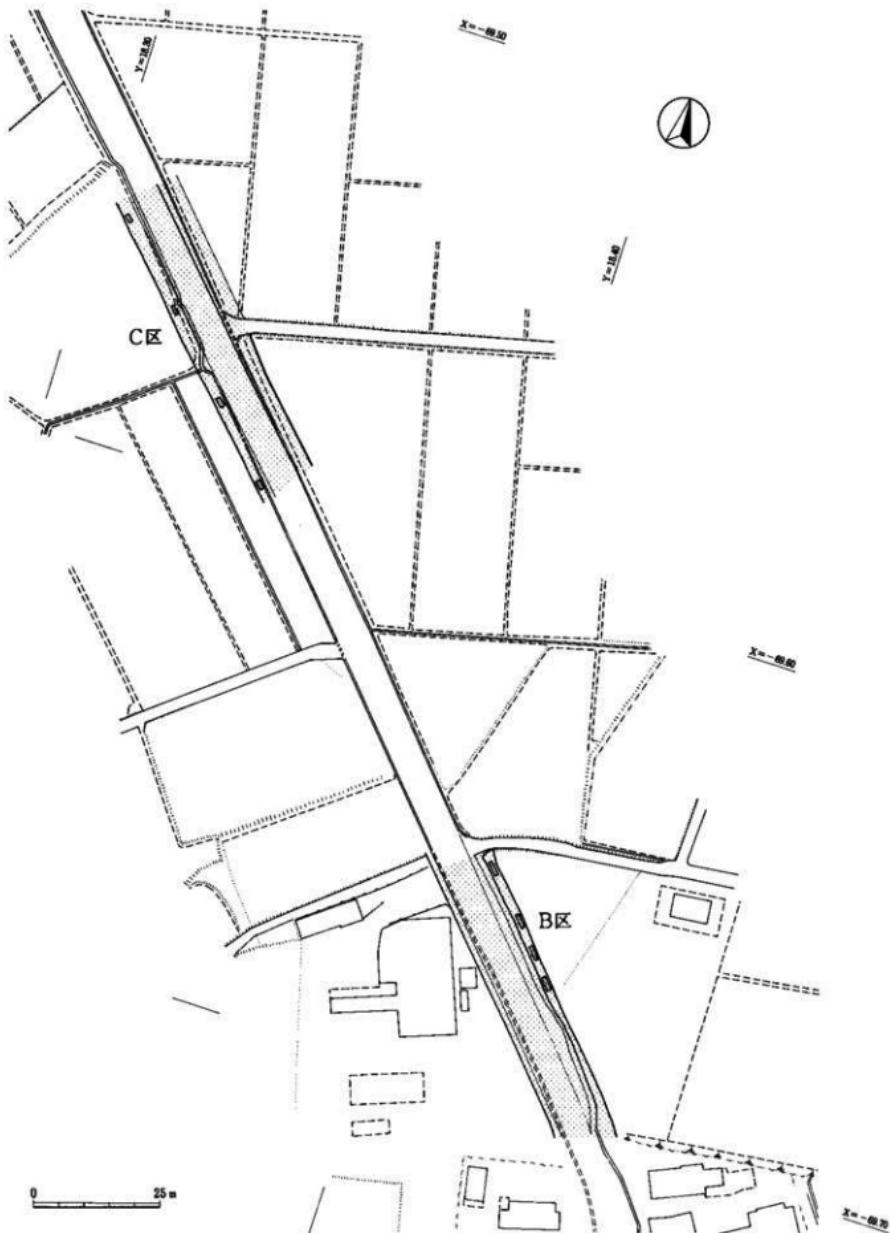
調査に際しては各年度とも、作業の安全や遺構・遺物の出土状況を考慮しながら、重機と人力を併用して調査を行った。



第3図 小グリッド設定



第4図 A区遺構配置図



第5図 B区・C区トレンチ配置図

3 遺跡の位置と周辺の遺跡

根岸根遺跡は、袖ヶ浦市下根岸字川崎209-1ほかに所在する。清澄山の北斜面を水源にして東京湾に向かって北西に流れる小櫃川の河口から約8km遡った中流域左岸に位置し、付近は河川によって開析され、広い氾濫平野が形成されている。右岸側は2km程の低位段丘面を挟んで袖ヶ浦台地の西端に至り、左岸側は狭い低位段丘面を挟んで、木更津台地の東端に至る。木更津台地の東端は、小櫃川に注ぐ幾多もの支谷によって樹枝状に開析され、大竹丘陵と呼ばれる急峻で複雑な地形を呈している。

調査区は、小櫃川と標高47mほどの大竹丘陵に挟まれた低地上にあり、地形的には平成9年度調査区C区が氾濫平野と旧河道、B区が下位段丘面から旧河道に至る斜面、A区と平成11年度調査区が下位段丘面にそれぞれ相当する。調査区の標高は、平成9年度調査区C区が15m、B区が16m程であり、A区及び11年度調査区が18m~20mとやや高く、小櫃川との比高差は3m~8mとなっている。

本遺跡周辺では、古墳群や城館跡が多数存在することは古くから知られていたが¹¹⁾、発掘調査例は少ない¹²⁾。近年に至って、本遺跡の南西側台地上で、ゴルフ場開発に伴い「大竹遺跡群」として昭和61年度から平成2年度にわたり、財団法人君津郡市文化財センターによって台地全面にわたる大規模な調査が行われ、各時代にまたがる数多くの遺構・遺物が検出され、周辺地域史の解明に貴重な資料を提供している¹³⁾。

以下、近年の成果に基づいて、時代別に周辺遺跡を概観することとする。

旧石器時代については、発掘調査例自体がいまだに少なく、その様相を的確に述べることは困難である。わずかに文脇遺跡¹⁴⁾及び林遺跡¹⁵⁾において、Ⅹ層からⅨ層及びⅢ層からⅣ層の小規模なブロックがそれぞれ検出されている程度である。しかし、近隣地域からは比較的大規模な検出例もあり、本遺跡周辺の台地上にも、包含地がある可能性は高い。

縄文時代の遺跡は、本遺跡西南側の台地上に展開する大竹遺跡群をはじめとして、点在する状況が窺える。前期以前では、大竹遺跡群内の二又塙遺跡から草創期の石器、早期から前期にかけての礫群や竪穴住居跡、炉穴、陥穴が検出されている。後期は大竹遺跡群内の笊田遺跡などで集落跡が検出されている。

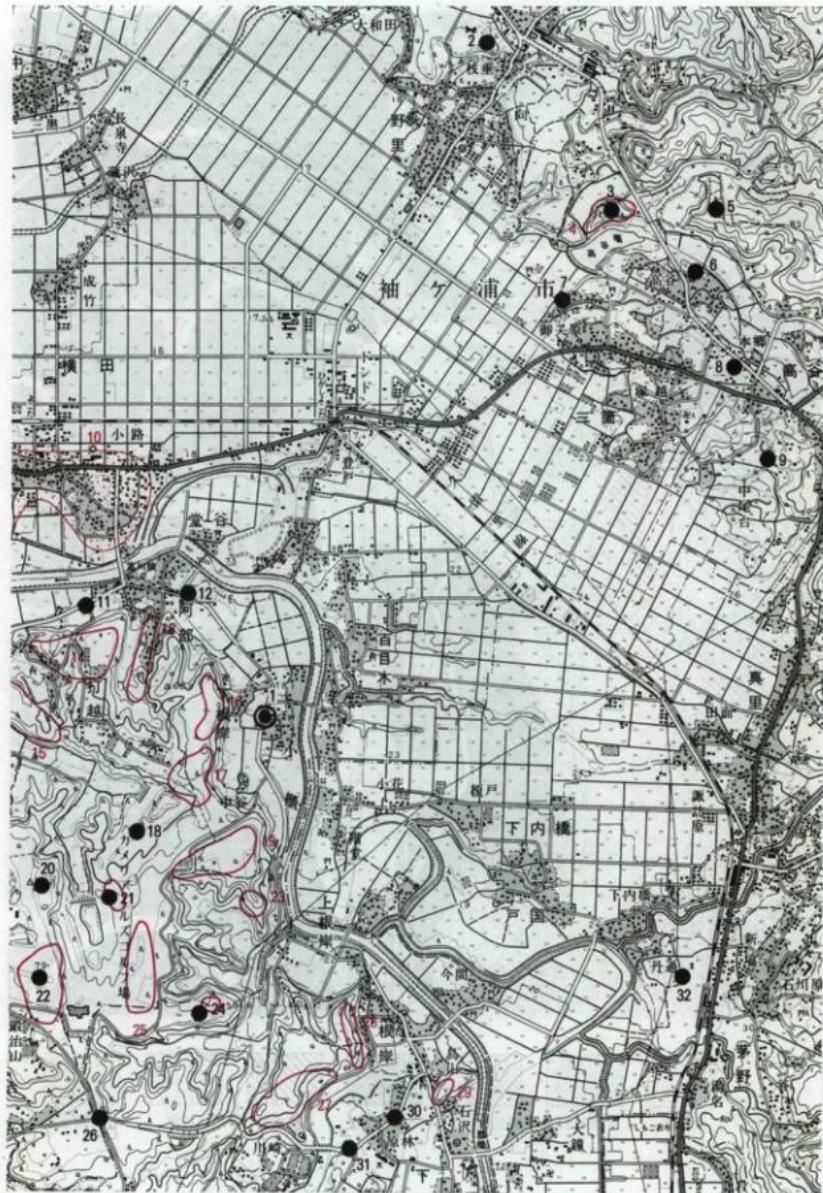
弥生時代中期から古墳時代前期にかけては、大竹遺跡群内で大規模な集落や方形周溝墓群・古墳群が検出されている。特に向神納里遺跡における須和田式期の方形周溝墓と、笊田遺跡における須和田式期集落跡の検出は注目される。また、文脇遺跡や清水井遺跡で後期の集落や方形周溝墓が検出されている。このほか、大竹遺跡群内の三ツ田台遺跡で古墳時代前期から後期の集落跡が検出されている。なお、本遺跡から5kmほど下流の小櫃川自然堤防上の芝野遺跡¹⁶⁾や菅生遺跡では、弥生時代後期から続く水田跡も検出されている。

古墳群についても周辺地域は小櫃川流域の中で比較的密に分布し、前方後円墳や前方後方墳を1~2基含む古墳群が多い。その中には、本遺跡に隣接する阿部堂谷古墳群や下根岸古墳群、出現期古墳や50m級の前方後方墳を含む滝ノ口向台古墳群、40m~50m級の前方後円墳を含む打越平ヶ作古墳群や打越北上原古墳群などがある¹⁷⁾。

奈良・平安時代では、方形周溝状遺構と石櫃・火葬墓が、三ツ田台遺跡¹⁸⁾及び林遺跡で検出されている。また、笊田遺跡で墨書「千万」のある、骨蔵器の蓋に転用された須恵器の杯身¹⁹⁾(報告では大竹遺跡扱い)、打越平ヶ作古墳群²⁰⁾で骨蔵器転用の縁釉手付瓶が出土している。集落については、小櫃川の河岸段丘上の山王台遺跡²¹⁾で検出されている。



第6図 根岸根遺跡周辺地形分類図（1/10,000）



第7図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)

中世には、応永年間の検田帳により畦蒜莊横田郷の存在が知られる¹³⁾。今回の調査区に隣接する大字阿部の地名が、応永18年（1411年）の検田帳に見られることや、調査範囲の東にある根岸根神社が、倉玉稻魂命を祭神として、天文年間（16世紀前半）に畦蒜莊根岸郷の産土神として祀られたと言われている¹⁴⁾ことから、本遺跡は畦蒜莊に含まれるものと考えられる。戦国期には、本遺跡の東約8kmに所在する真里谷城を有した上総武田氏（真里谷氏）の実質的な支配下におかれたと考えられるが、周辺には打越砦跡をはじめとして、関連する数多くの城館跡が存在する¹⁵⁾。これらに關係する遺跡として、本遺跡の北西に接する重常遺跡¹⁶⁾・西新田遺跡の調査が行われている。

1 根岸根遺跡 2 文脇遺跡 3 清水井遺跡 4 清水井古墳群 5 下向山遺跡 6 高谷堀ノ内城 7 三箇遺跡 8 荒久遺跡 9 大豆郷遺跡 10 横田郷中心集落 11 重常遺跡 12 西新田遺跡 13 阿部谷畠古墳群 14 打越北上原古墳群 15 打越平ヶ作古墳群 16 阿部堂谷古墳群 17 下根岸古墳群 18 二又堀遺跡 19 下根岸内出原古墳群 20 箕田遺跡 21 向神納里遺跡 22 三ツ田台遺跡 23 下根岸矢ヶ作古墳群 24 狐谷遺跡 25 大竹古墳群 26 林遺跡 27 根岸古墳群 28 重三台古墳群 29 石塚古墳群 30 山王台遺跡 31 上ノ山遺跡 32 丹過遺跡

注1 千葉県教育庁文化課 1990『千葉県所在古墳群詳細分布調査報告書』

2 打越北上原古墳群3号墳が太平洋戦争直後に、米軍によって調査されている。また、打越平ヶ作古墳群においても昭和52年に、打越古墳群発掘調査団によって丘陵先端の2基の円墳が調査されている。しかし、いずれも本報告はなされていない。

袖ヶ浦市史編さん委員会 1999『袖ヶ浦市史 資料編1 原始・古代・中世』 袖ヶ浦市

3 稲葉昭智ほか 1991『箕田遺跡・三ツ田台遺跡・大竹古墳群(1)－大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書－』（財）君津都市文化財センター

4 稲葉昭智ほか 1993『大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書II－二又堀遺跡・大竹古墳群－』（財）君津都市文化財センター

5 稲葉昭智ほか 1994『大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書III－尾烟台遺跡・内出原遺跡・大竹古墳群・下根岸古墳群－』（財）君津都市文化財センター

6 稲葉昭智ほか 1995『大竹遺跡群埋蔵文化財調査報告書IV－向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群－』（財）君津都市文化財センター

7 加藤正信ほか 1995『袖ヶ浦市文脇遺跡』（財）千葉県文化財センター

8 井口 崇ほか 1987『林遺跡』（財）君津都市文化財センター

9 能城秀喜 1994『林遺跡II』（財）君津都市文化財センター

10 西原崇浩 1994『嘉登遺跡・大竹長作古墳群』（財）君津都市文化財センター

11 神野 信ほか 1992「木更津市芝野遺跡における水田跡について」『研究連絡誌』第34号（財）千葉県文化財センター

12 古墳群の範囲と名称は、（財）千葉県文化財センター1987『千葉県埋蔵文化財分布地図（3）』をもとにした。

13 石櫃の出土した遺構は、大竹古墳群の第40号墳として報告されている。

14 出土したときは、大竹遺跡として報告されている。

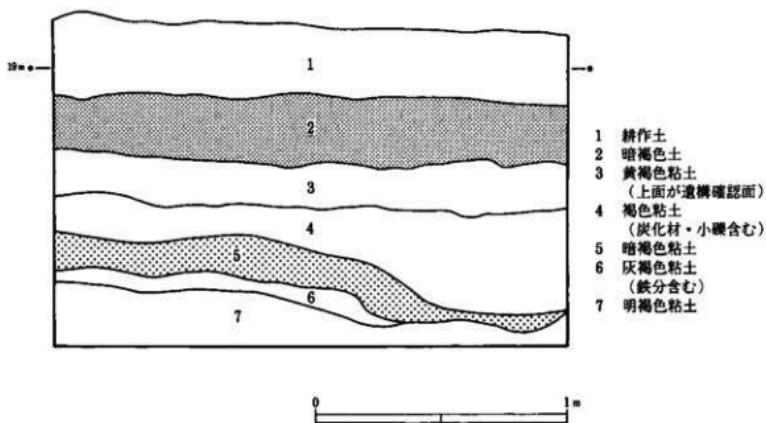
対馬郁夫ほか 1976『袖ヶ浦町大竹遺跡発掘調査報告書』 千葉県文化財保護協会

- 11 野中 徹 1977『打越古墳群発掘調査報告書』
- 12 (財)君津都市文化財センター 1989「山王台遺跡」『君津都市文化財センター年報No.7』
(財)君津都市文化財センター 1997「山王台遺跡」『君津都市文化財センター年報No.14』
- 13 柴田龍司 1993「小櫃川流域における中世遺跡の変遷」『研究連絡誌』第37号 (財)千葉県文化財センター
笛生 衛 1998「村の生活(上総郡哇蒜莊横田郷を舞台に)」『千葉県の歴史 資料編 中世1 考古資料』
千葉県
- 14 袖ヶ浦市史編さん委員会 1999『袖ヶ浦市史 自然・民俗編』 袖ヶ浦市
- 15 千葉県教育庁文化課 1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ—旧上総・安房地域—』
- 16 糸原 清 1999『袖ヶ浦市重常遺跡』 (財)千葉県文化財センター

II 検出した遺構と遺物

1 概要

今回の調査は道路の拡幅に伴うもので、現道に沿った長さ約500mが対象範囲となり、このうち約200mにおいて遺構の存在が認められた。遺構の認められたA区における土層は、全体的に粘土質で、今回調査しただけでも耕作土以下6枚の粘土層が認められた。このうち3層の黄褐色粘質土層の上面が遺構の確認面である。



第8図 基本層序

調査区の幅については、先の「調査の方法」でも述べたとおり、現道部分を除いた4m程であるが、堅穴住居跡7軒、掘立柱建物跡2棟、溝11条、土坑・小ピットを調査した。単純計算で800m²に建物9軒が存在すると言うことは1軒あたり89m²、約27坪がその敷地となる。かなり密集した集落が、今回の調査区周辺に存在していたと言えよう。

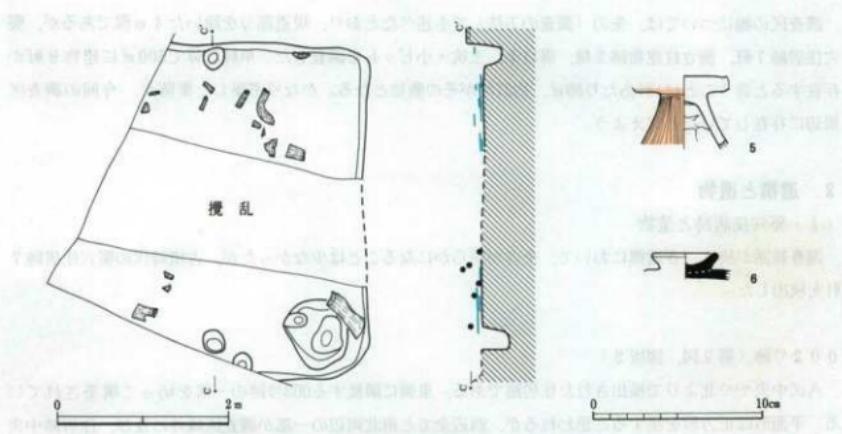
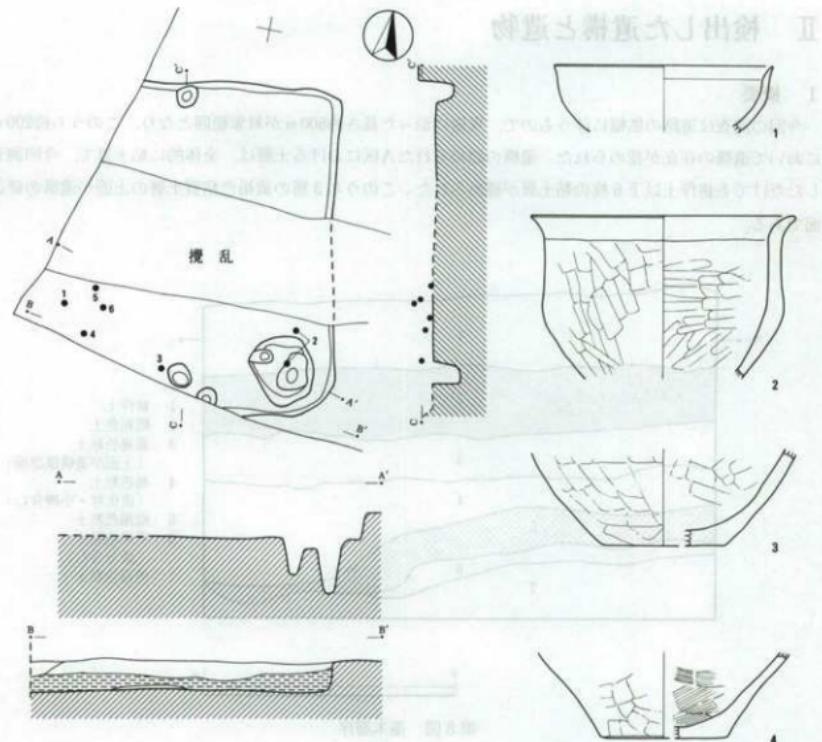
2 遺構と遺物

(1) 堅穴住居跡と遺物

調査範囲が狭く、各遺構において、全容が明らかになることは少なかったが、古墳時代の堅穴住居跡7軒を検出した。

002号跡（第9図、図版2）

A区中央やや北よりで検出された住居跡である。東側に隣接する003号跡の一部を切って構築されている。平面形は正方形を呈すると思われるが、西辺全てと南北両辺の一部が調査区域外に及び、住居跡中央に溝状の搅乱が入り込んでいるため詳細は不明である。本遺構に伴う施設は、北辺際の床面のピット1基、



第9図 002号跡実測図・出土遺物

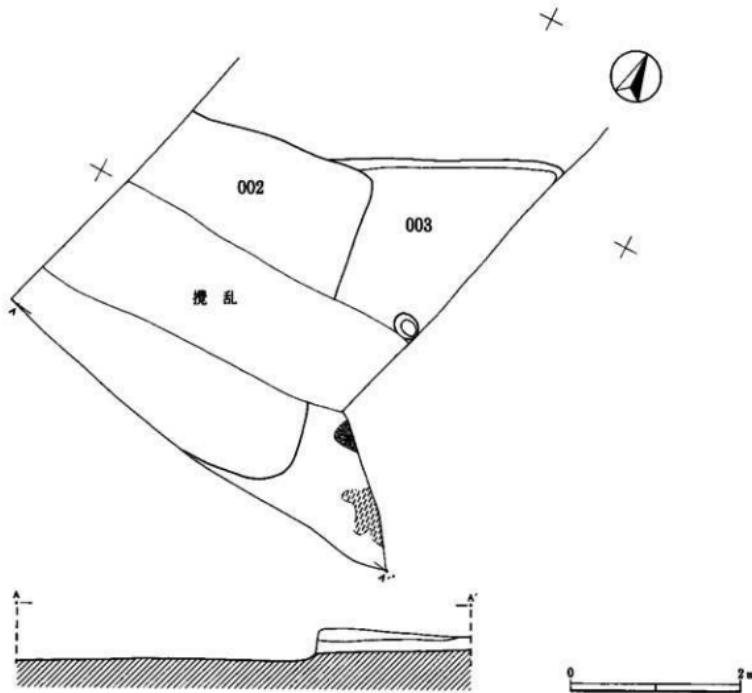
南辺よりの床面の小ピット 2 基、南東隅の床面の小ピット 2 基を伴う深い窪みである。

覆土の堆積は、床面直上ほぼ全面において厚さ 20cm 程の、炭化材を多く含む黒褐色土層が認められた。この層中から原型の一部を留める炭化した丸太材が多く検出された。遺物の多くも、この層中において検出された。

本遺構に伴う遺物には、土師器の杯 1 点・甕 3 点・高杯 1 点、須恵器の蓋 1 点が挙げられる。1 は杯で、口縁部はヨコナデされ、体部はヘラ削り後ナデが加えられる。2~4 は甕で、2 の口縁部はヨコナデされ、体部は粗くヘラ削りされる。3 の外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。4 の外面はヘラ削りされ、内面にはハケ目調整が施されている。5 は高杯で、杯部内面と脚部外面はヘラミガキされる。杯部内外面と脚部外面は赤彩される。6 は須恵器の蓋で、つまみの部分だけが残存する。

003 号跡(第10図、図版 2)

002 号跡の東側で検出された住居跡である。002 号跡によって西側の一部を切られている。平面形は正方形を呈すると思われるが、東辺と南辺が調査区域外に及び、住居跡中央に溝状の搅乱が入り込んでいるため詳細は不明である。本遺構に伴う施設は、中央付近の床面からの深さが 20cm 程の小ピット 1 基のみである。そのほか南約 1m には炉跡と思われる焼土の堆積が認められた。



第10図 003号跡実測図

覆土の堆積は、上から褐色土、暗褐色土で、この暗褐色土中において焼土の南側約50cmの位置に炭化物の集中範囲が認められた。

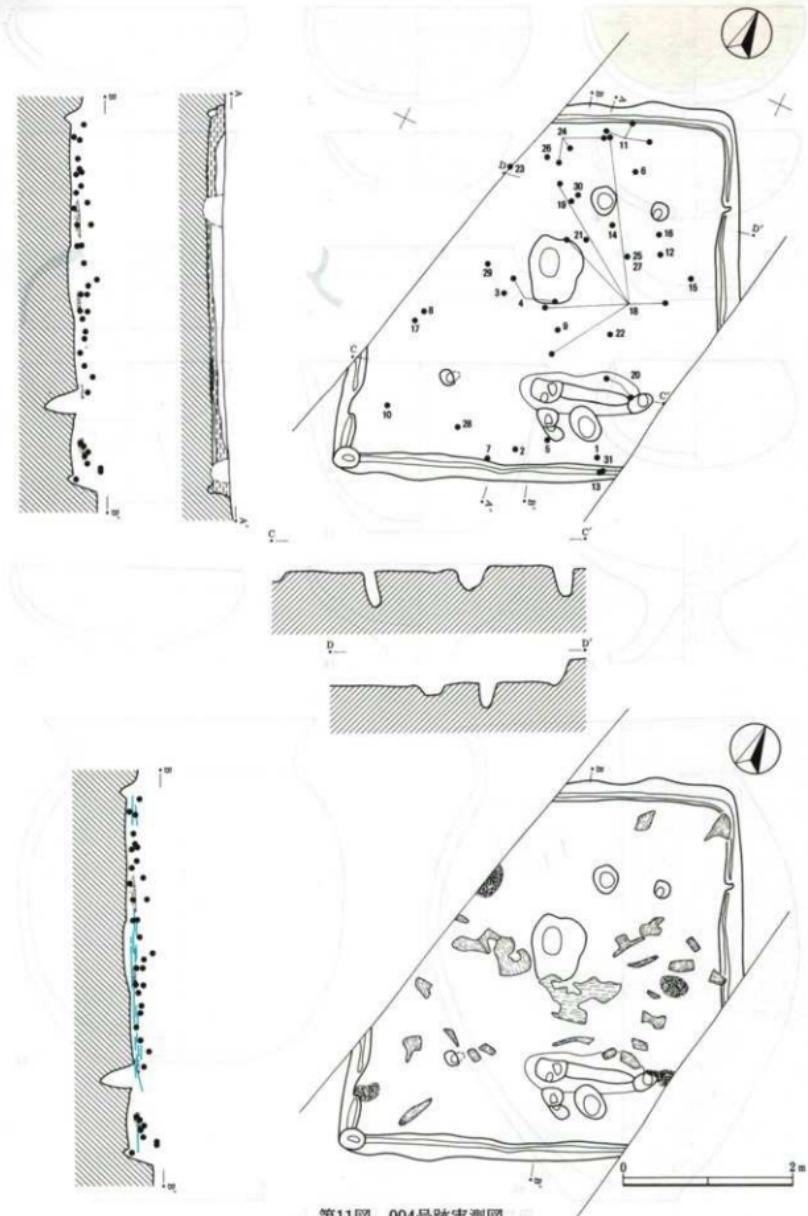
本遺構からは、土師器の細片が出土しているが、図示できる遺物はない。

004号跡（第11～14図、図版2・3）

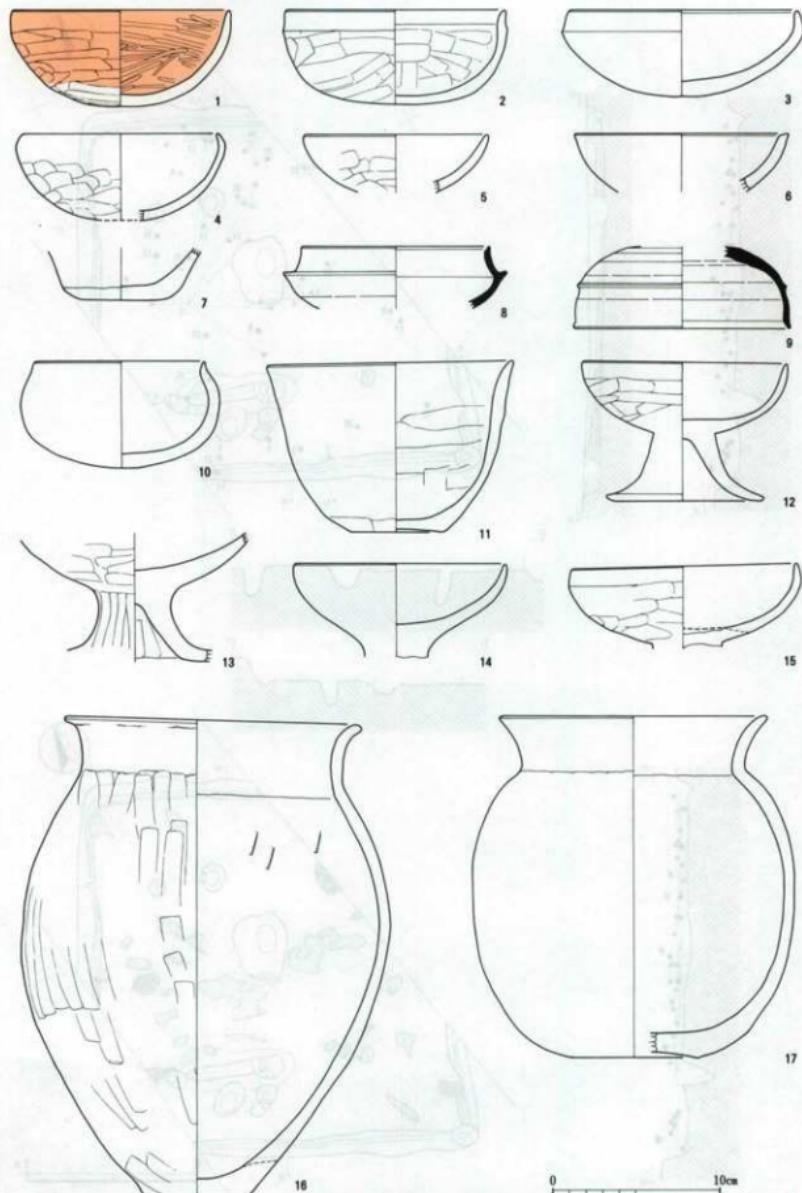
002・003号跡の北約19mで検出された住居跡である。平面形は正方形を呈すると思われるが、北辺と西辺の一部、南辺と東辺の一部が、調査範囲外に及んでいたため詳細は不明である。本遺構に伴う施設は、床面の壁際四辺、ほぼ全周を廻る溝、ほぼ中央に見られる浅い窪み、南東隅近くの細長い高まり、10基の小ピットである。壁際に認められる溝は、床面からの深さが10cm程を測り、壁を支える板列を固定する壁溝と考えられる。中央の窪みは、断面レンズ状を呈し、床面からの深さは5cm程であり、炉跡のような焼土の堆積も認められず、性格は不明である。南東隅の細長い高まりは、南辺に沿うように伸びる、東西1.4m、南北0.5m程の帯状を呈し、床面からの高さが3cm程である。間仕切りの類であろうか。10基の小ピットは、北東よりに2基、南東よりに6基、南西よりに2基がかたまっている。北東にかたまっている2基の、床面からの深さは、西よりのものが10cm、東よりのものが20cm程で、東よりのものは主柱穴と考えられる。南東にかたまっている6基は、帯状を呈する高まりに隣接して確認された。6基のうち3基は高まりの東西に位置し（西側のものが2基の重複）、他の3基は南側の裾部に並んでいる（西側のものが2基の重複）。床面からの深さが、高まりの東西のものは、西から順に30cm・10cm・30cmを測り、このうち東よりのものは主柱穴と考えられる。高まりの南のものは、西から順に10cm・20cm・10cmを測る。南西にかたまっている2基は、住居跡南西隅の角と、そこから中央より1.4m程に位置する。床面からの深さは、角のものが20cm程、中央よりのものが30cm程をそれぞれ測る。中央よりのものは中央に向かって斜めに傾斜する形態を取っているが、主柱穴で、柱の抜き取りが行われたと考えられる。

覆土の堆積は、床面直上はほぼ全面において厚さ10cm程の、炭化材を多く含む暗褐色土層が認められた。この層中から原型の一部を留める炭化した丸太材を多く検出した。検出した遺物の多くも、この層中からものである。

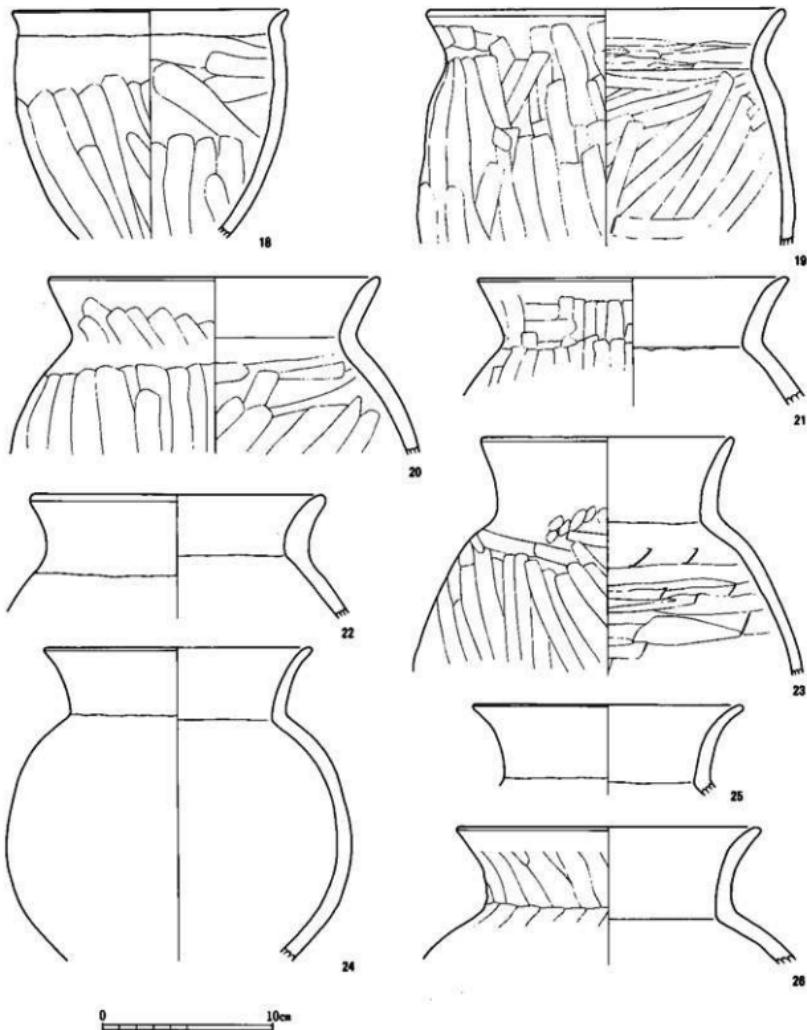
本遺構に伴う遺物には、土師器の杯6点・小型甕1点・碗1点・鉢1点・高杯4点・甕15点・壺1点、須恵器の杯1点・蓋1点が挙げられる。1～6は杯で、1の体部外面はヘラ削りされ、内面はヘラミガキされる。口縁部はヨコナデされる。内外面共赤彩される。2の体部外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。内外面には赤彩の痕跡が残る。3・4の体部外面はヘラ削りされ、内面はヘラミガキされる。口縁部はヨコナデされる。内外面には赤彩の痕跡が残る。5の外面はヘラ削りされ、口縁部はヨコナデされる。内外面には赤彩の痕跡が残る。6は器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。7は小型甕の底部と考えられるもので、器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。8は須恵器杯で、灰色を呈する。9は蓋で、天井部は回転ヘラ削りされる。淡灰色を呈する。10は碗で、器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。外面には部分的に、赤彩の痕跡が残る。11は鉢で、外側体部下端はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。12～15は高杯である。12の杯部外面はヘラ削りされ、内面には赤彩の痕跡が残る。13の杯部外面はヘラ削りされ、内面はヘラミガキされる。脚部外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。14・24は器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。15の外面はヘラ削りされる。16～26・28～31は甕である。16の胴部外面はヘラ削りの後ヘラナデされ、内面はヘラナデされ



第11図 004号跡実測図

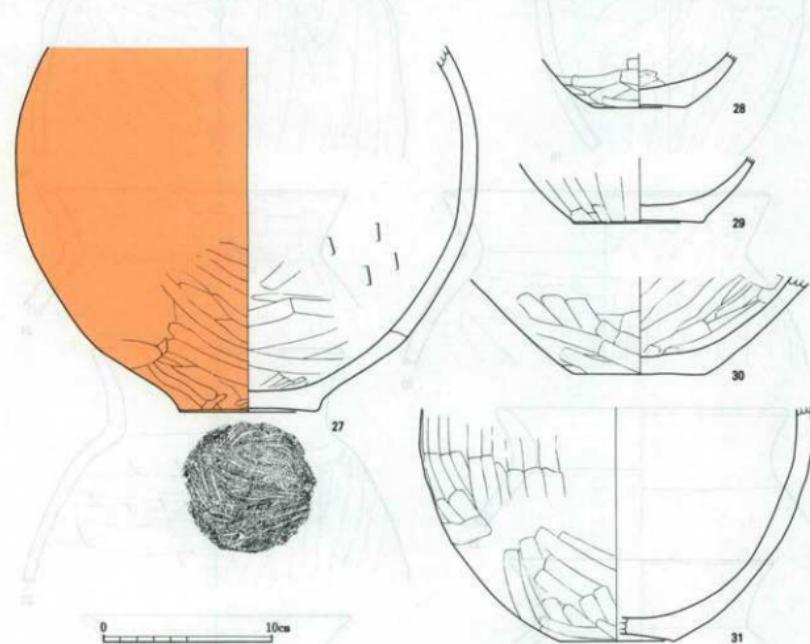


第12図 004号跡出土遺物(1)



第13図 004号跡出土遺物（2）

る。口縁部はヨコナデされる。17は器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。18~21・23の内外面はヘラ削りされ、口縁部はヨコナデされる。22の口縁部はヨコナデされ、胸部内面は粗くヘラナデされる。25の口縁部はヨコナデされる。26の外面はヘラ削りされ、口縁部内面はヨコナデされる。28~31の外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。27は壺で、内外面共ヘラナデされる。外面は赤彩される。

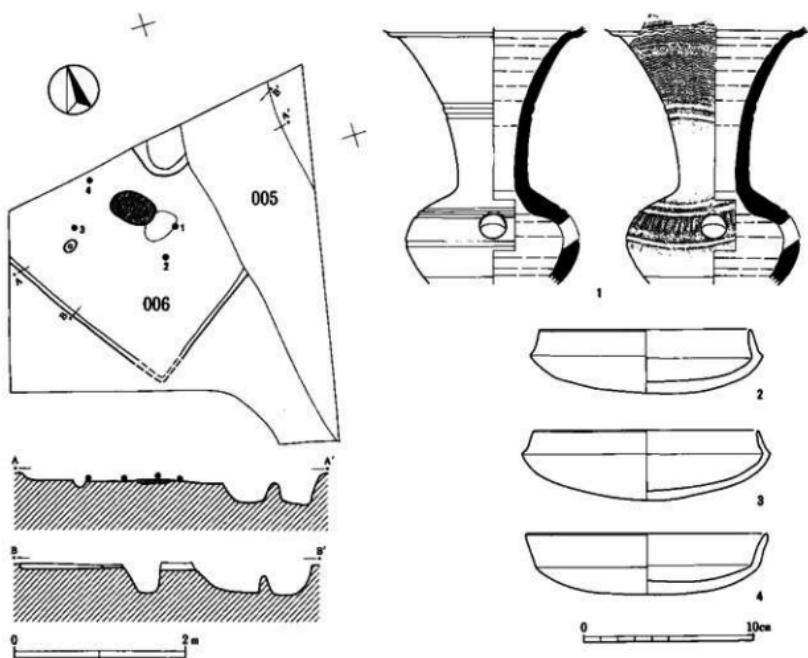


第14図 004号跡出土遺物（3）

006号跡（第15図、図版3）

002号跡の南約8mで検出された住居跡である。平面形は正方形を呈すると思われるが、西辺の一部と北辺が調査範囲外に及び、東辺と南辺の一部は005号跡（溝状遺構）に切られているため、詳細は不明である。本遺構に伴う施設は、中央やや南により認められた浅い窪みのみである。

本遺構に伴う遺物は、須恵器の甌1点と、土師器の杯3点が挙げられる。1は須恵器の甌で、頸部には櫛描き波状文が、体部には櫛衝刺突文が巡る。胎土には白色砂粒を多く含む。白味を帯びた灰色を呈し、焼成は良好である。2・3は杯で、器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。4は杯で、体部は内外面共ナデの後ヘラミガキされ、口縁部はヨコナデされる。

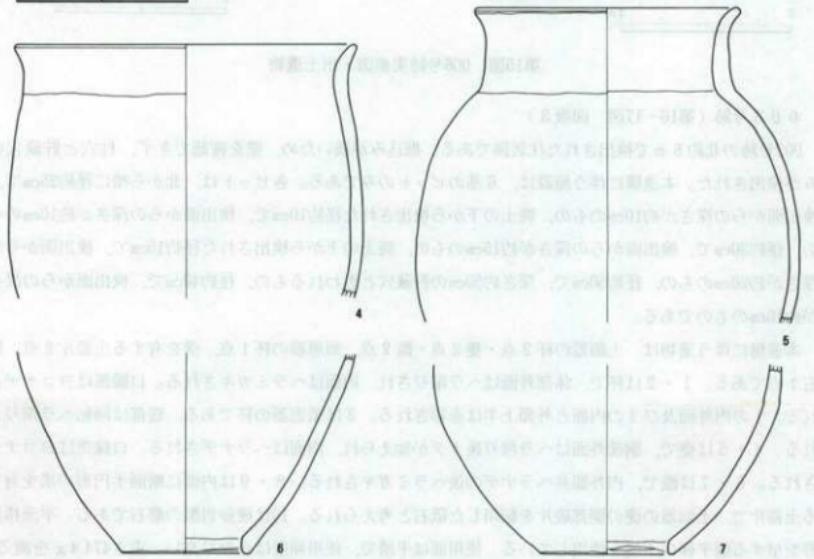
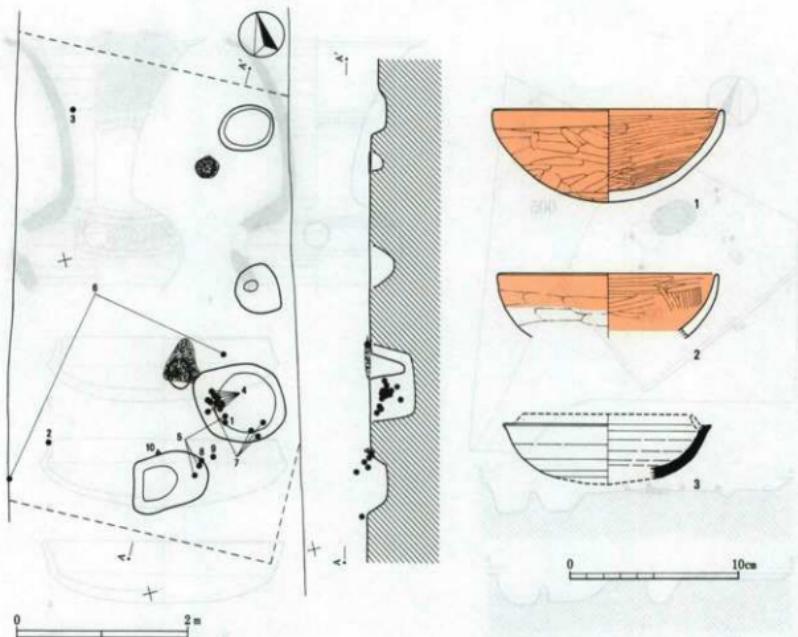


第15図 006号跡実測図・出土遺物

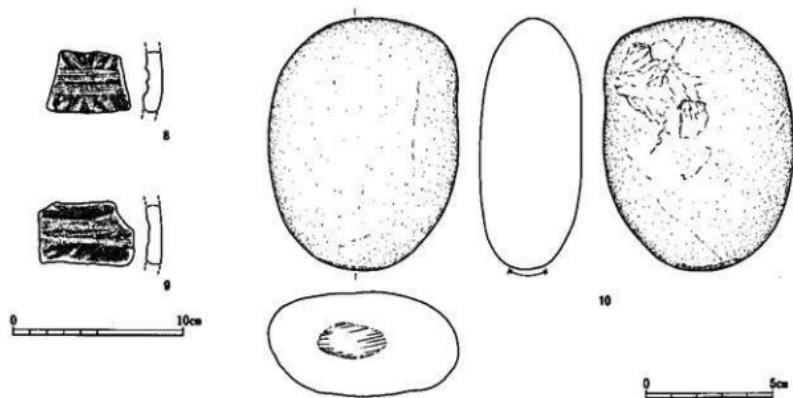
008号跡（第16・17図、図版3）

002号跡の北約8mで検出された住居跡である。掘込みが浅いため、壁を確認できず。柱穴と貯蔵穴のみが検出された。本遺構に伴う施設は、6基のピットのみである。各ピットは、北から順に径約25cmで、検出面からの深さが約10cmのもの、焼土の下から検出された径約10cmで、検出面からの深さが約10cmのものの、径約30cmで、検出面からの深さが約15cmのもの、焼土の下から検出された径約15cmで、検出面からの深さが約20cmのもの、径約50cmで、深さ約50cmの貯蔵穴と思われるものの、径約40cmで、検出面からの深さが約10cmのものである。

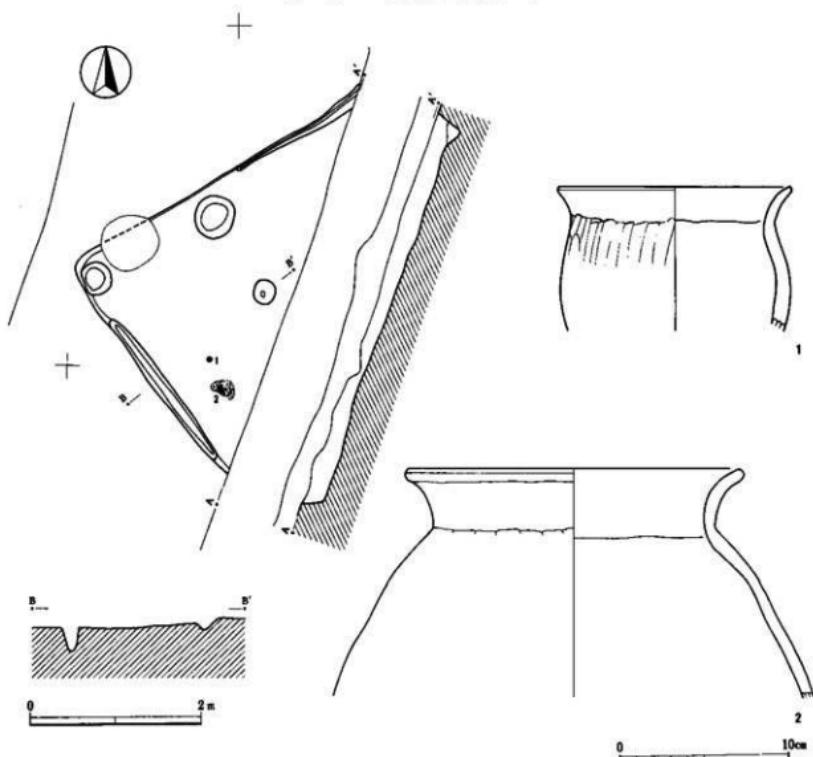
本遺構に伴う遺物は、土師器の杯2点・甕2点・瓶2点、須恵器の杯1点、溝を有する土器片2点、磨石1点である。1・2は杯で、体部外面はヘラ削りされ、内面はヘラミガキされる。口縁部はヨコナデされる。1の内外面及び2の内面と外面上半は赤彩される。3は須恵器の杯である。底部は回転ヘラ削りされる。4・5は甕で、胸部外面はヘラ削り後ナデが加えられ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。6・7は瓶で、内外面共ヘラナデの後ヘラミガキされる。8・9は内面に断面半円形の溝を有する土器片で、土師器の甕の胸部破片を転用した砥石と考えられる。10は硬砂岩製の磨石である。平面横円形を呈する偏平様の下端を使用している。使用面は平滑で、使用頻度はかなり高い。重さ474.4gを測る。



第16図 008号跡実測図・出土遺物（1）



第17図 008号跡出土遺物（2）



第18図 012号跡実測図・出土遺物

012号跡(第18図、図版4)

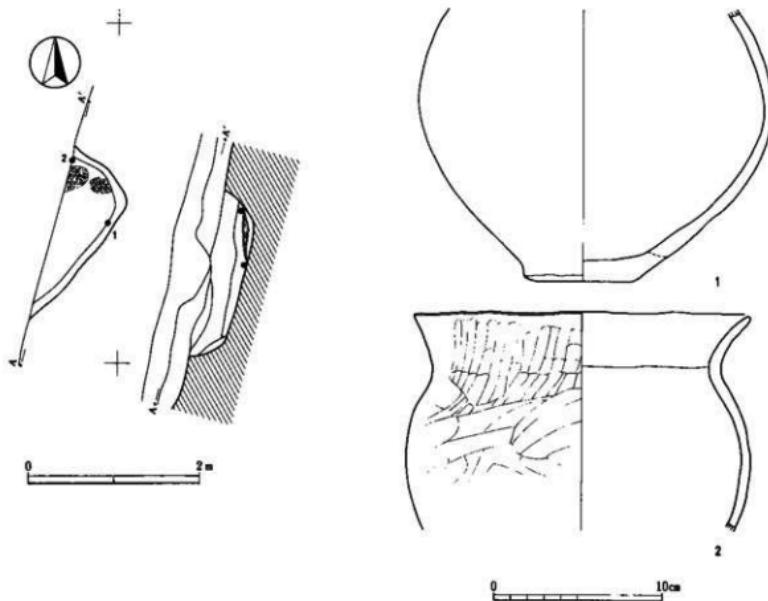
004号跡の北約12mで検出された住居跡である。平面形は正方形を呈すると思われるが、北辺の一部と東辺、西辺の一部と南辺が調査範囲外に及んでおり詳細は不明である。また北辺の一部に円形の搅乱が入っている。本遺構に伴う施設は、北辺と南辺の一部の壁際において検出された壁溝と床面の3基の小ピットである。

本遺構に伴う遺物は、土師器の小型壺1点・甕1点が挙げられる。1・2共胸部外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。口縁部はヨコナデされる。

013号跡(第19図、図版4)

本調査範囲の北端で検出された住居跡である。平面形は方形を呈すると思われるが、北辺の一部と西辺、東辺の一部と南辺が調査範囲外に及んでいるため詳細は不明である。ピットや炉跡は検出されず、北東隅の壁際から焼土が検出されたのみである。

本遺構に伴う遺物は土師器の壺1点・甕1点で、北東隅に堆積した焼土の周辺から検出された。1は壺で、器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。2は甕で、外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。

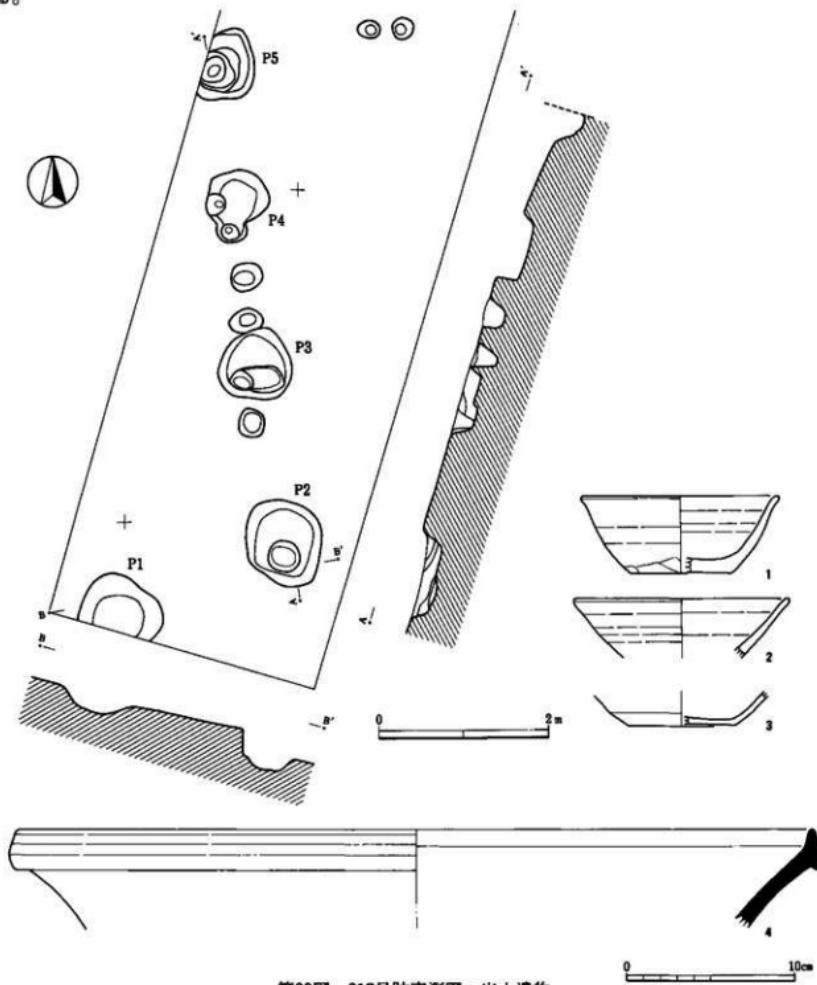


第19図 013号跡実測図・出土遺物

(2) 掘立柱建物跡と遺物

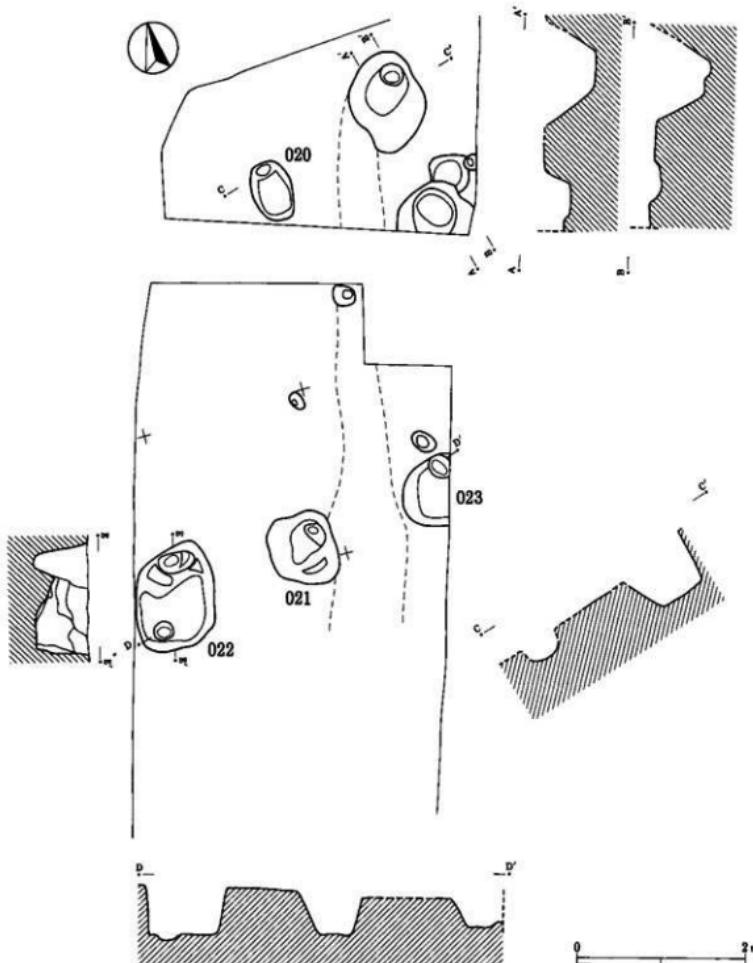
017号跡(第20図、図版4)

本調査範囲南端で検出された掘立柱建物跡である。南北3間以上、東西1間以上と思われるが、北西と、南北が調査範囲外に及んでおり、詳細は不明である。柱穴は一边約50cmの方形を呈し、検出面からの深さは10cm程を測る。本遺構の周辺には、P5から1.25mほど離れて小ピットが2基、P4とP3の間に小ピットが2基、P3とP2の間に小ピットが1基確認されているが、本遺構と直接関係するかどうかは不明である。



第20図 017号跡実測図・出土遺物

本遺構に伴うと思われる遺物は、柱穴内から出土した土師器の杯3点と須恵器の大甕1点が挙げられる。1～3は杯で、1・2はP5から、3はP3から出土したものである。1の底部は回転糸切り後周縁部が手持ちヘラ削りされる。3の体部下端は回転ヘラ削りされる。4はP5から出土した須恵器の大甕の口縁部で、胎土には白色砂粒を多く含む。灰色を呈し、焼成は良好である。



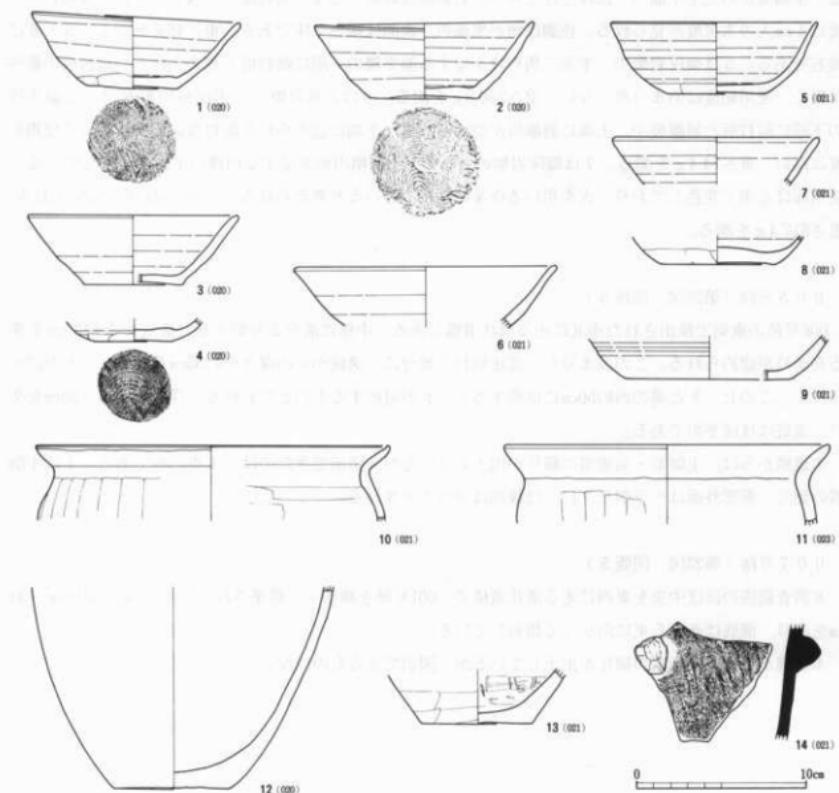
第21図 020・021・022・023号跡実測図

020・021・022・023号跡（第21・22図、図版5）

西側斜面出土物

017号跡の北約18mで検出されたピット群であるが、その位置関係からして掘立柱建物跡と考えられる。南北2間以上、東西3間以上と思われるが、東と西が調査範囲外に及び、中央に水道管が通っているため、詳細は不明である。梁行の北から2番目の柱穴において重複が認められることから、建替え等の可能性がある。周辺に小ピットが散在するが、本遺構との関係は不明である。

本遺構に伴う遺物は、土器の杯9点・甕3点・小型甕1点、須恵器瓶1点が挙げられる。1～9は杯である。1・4の底部は回転糸切り後全面手持ちヘラ削りされる。体部下端も手持ちヘラ削りされる。2・8の底部は回転糸切りされる。3・5の底部は遺存が悪く、切り離し方法は不明である。10～12は甕である。10・11の胴部はヘラ削りされ、口縁部はヨコナデされる。12は器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。13は小型甕で、外面はヘラ削りされ、内面はヘラナデされる。14は須恵器の瓶の破片で、把手は断面三角形を呈する。外面にはタタキ目が施され、黄褐色を呈する。



第22図 020・021・023号跡出土遺物

(3) 溝状遺構と遺物

001号跡（第23・24図、図版5）

本調査範囲のほぼ中央で、南北に長く検出された溝状遺構である。調査範囲のほぼ中央を走る溝に両脇から3本の溝が平行し、或いは合流するような状況を呈している。深さは10cm～32cmを測り、溝底は、中央部がやや浅く、南北両端がやや深くなる。

本遺構から出土した遺物は、器台・椀、羽口、鉄滓、敲石、磨石、獸骨などが挙げられる。1は器台の脚部で、外面はヘラミガキされ、内面はハケ目調整される。2は椀の底部であるが、器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。3は羽口の先端部破片である。体部外面は縦方向にきれいにヘラ削りで整えられている。側面の一部から先端部は、薄くガラス質に淬化し、一部がしづく状に垂れている。内面はきれいな穿孔部で、内径約23mmを測る。基部側は、破面である。色調は、基部側が明るい明褐色、先端近くは灰色から灰黒色に変化している。重さ243.9gを測る。4は平面不整多角形をした、偏平な炉内滓である。左側面から上下平面の一部は生きており、右側面は破面である。気孔はやや残るが、密度は高い。全面に1cm大の木炭痕が見られる。色調は地が黒褐色、表面は褐色氣味である。重さ48gを測る。5・6は敲石である。5は凝灰岩製で、平面三角形状を呈する偏平礫の一端に敲打痕が認められる。敲打痕の範囲は狭く、使用頻度はあまり高くない。重さ296.8gを測る。6は玄武岩製で、平面橢円形を呈する偏平礫の下端に敲打痕と剥離痕が、上端に剥離痕が認められる。下端に認められる敲打痕の範囲は幅広く使用頻度は高い。重さ74.4gを測る。7は凝灰岩製の磨石で、平面橢円形を呈する円礫の下面を使用している。使用面は赤黒く変色しており、火を用いる作業に関わっていると考えられる。一端に敲打痕が認められる。重さ817.4gを測る。

005号跡（第25図、図版5）

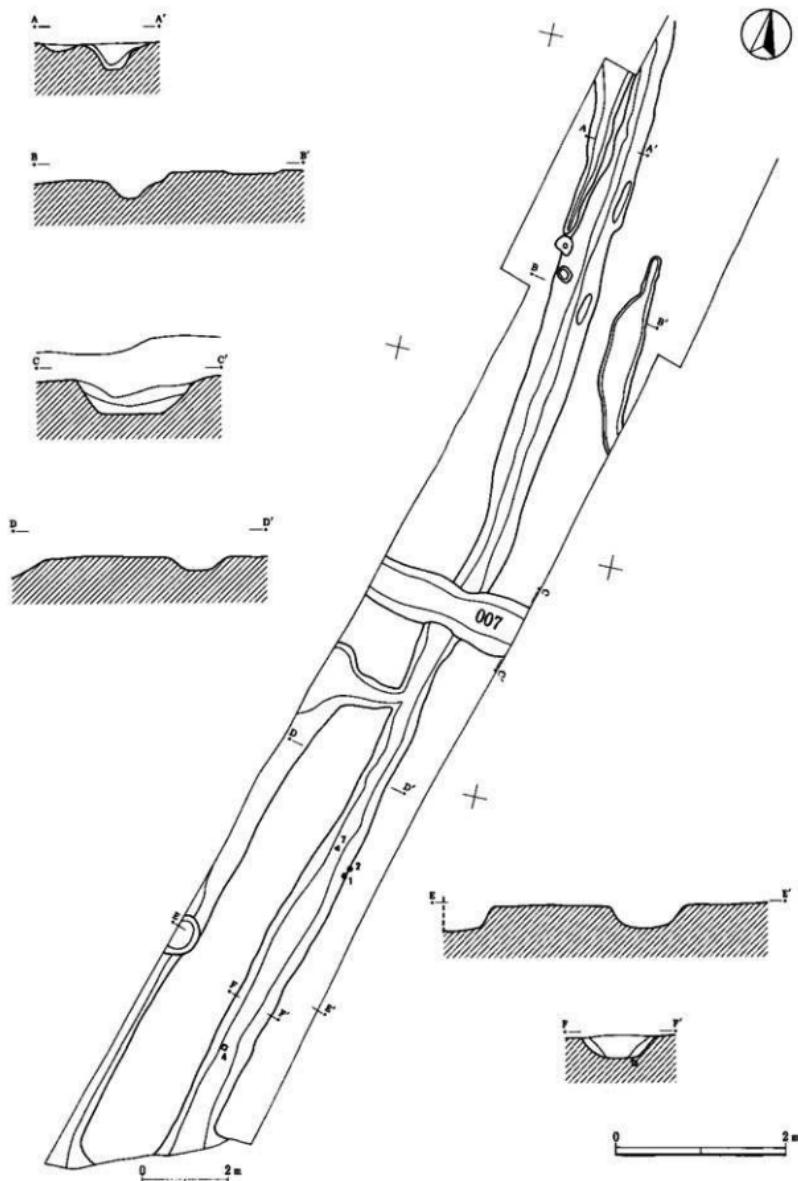
006号跡の東側で検出された南北に走る溝状遺構である。中程に溝を2分割する、溝底から約20cmを測る高まりが認められる。この高まりが一部途切れる部分に、溝底からの深さが約35cmを測るピットが認められる。このピットと溝の西約50cmに位置するピットが対応するものと思われる。深さは25cm～35cmを測り、溝底はほぼ平坦である。

本遺構からは、土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示できたのは、1点のみである。1は土師器の裏で、胸部外面はヘラ削りされ、口縁部はヨコナデされる。

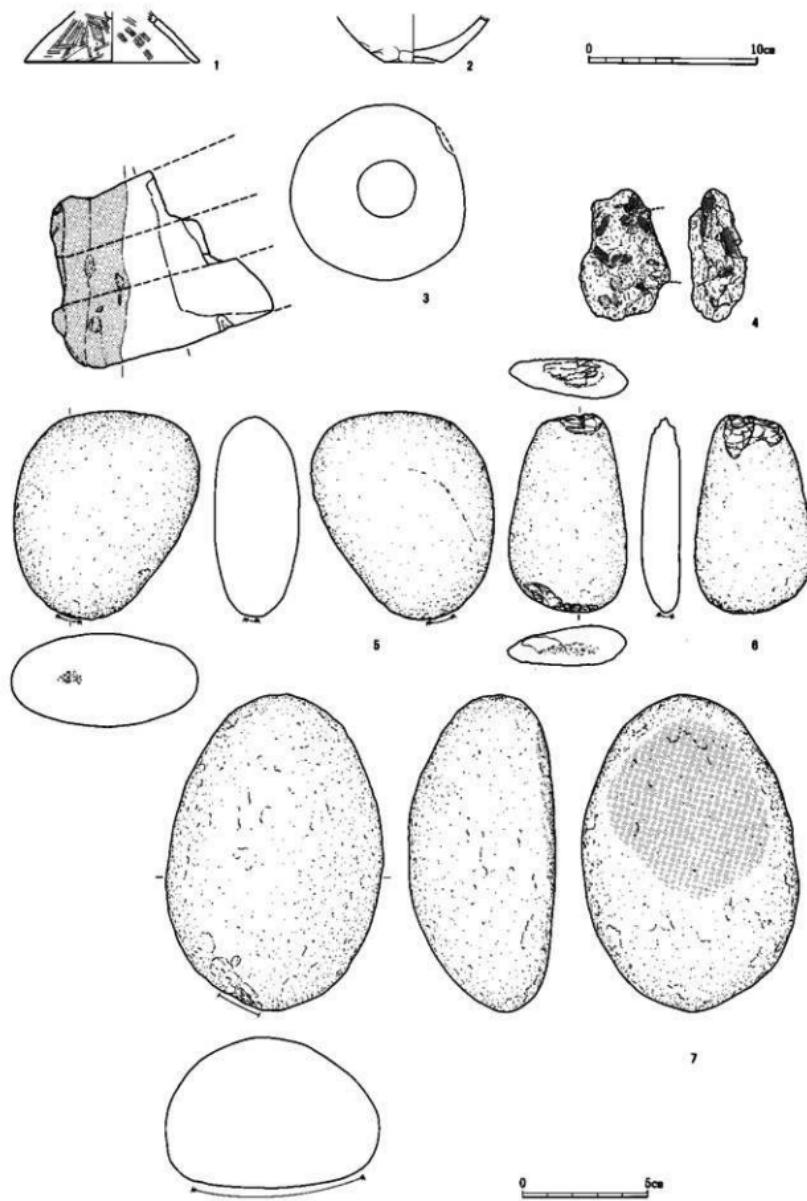
007号跡（第23図、図版5）

本調査範囲のほぼ中央を東西に走る溝状遺構で、001号跡を横切って構築されている。深さは19cm～31cmを測り、溝底は西から東に向かって傾斜している。

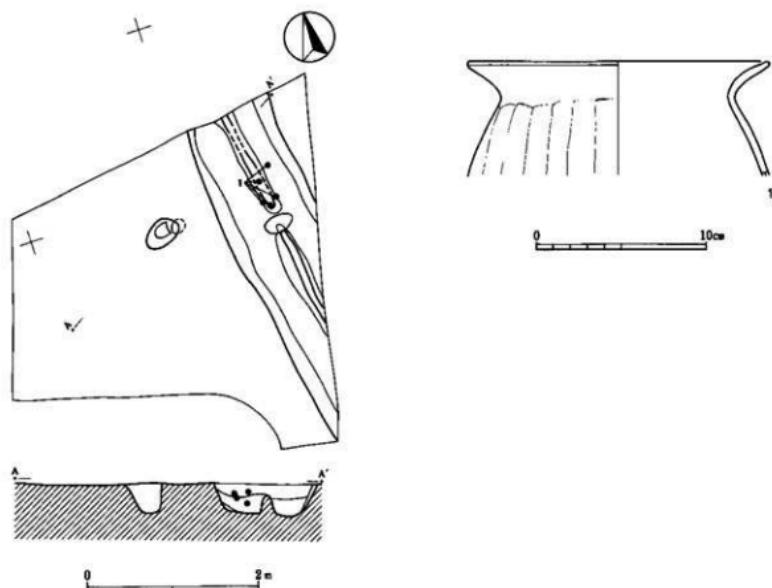
本遺構からは、土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。



第23図 001・007号跡実測図



第24図 001号跡出土遺物

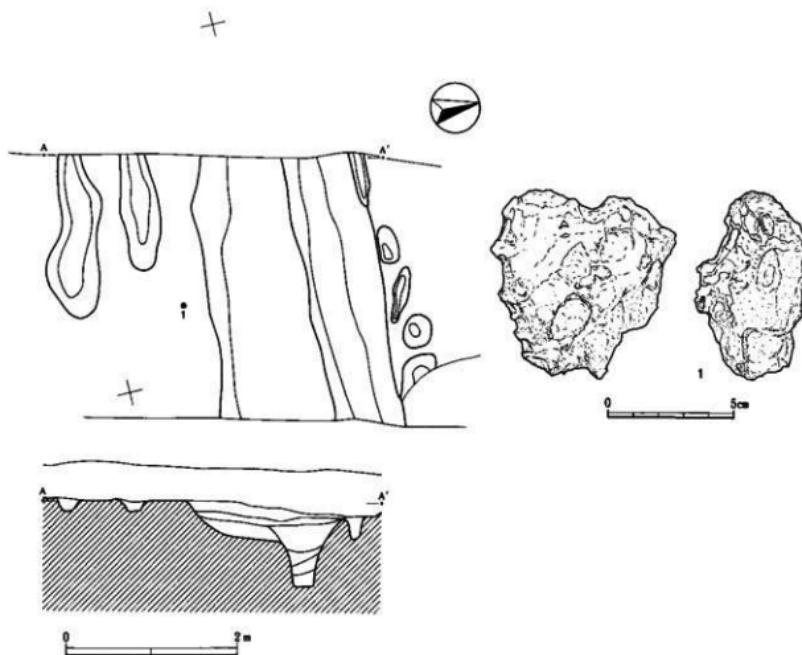


第25図 005号跡実測図・出土遺物

009号跡（第26図、図版6）

004号跡と008号跡に挟まれた位置で検出された東西に走る溝状遺構である。幅約1.5m以上の溝（深さ24cm～32cm）が埋没後、幅約1mの溝（深さ70cm～78cm）が構築されているのが土層断面の観察によって確認された。北側の縁辺に深さ約20cmのピットが並び、南側には平行する2条の溝（深さ5cm～13cm）が認められる。

本遺構からは、土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。図示できた遺物は、鉄滓1点である。1は平面逆台形をした、厚板状の橢形鍛冶滓である。上下平面は生きており、側面の一部が破面である。上面には、半流動状の滓部が目立つ。下面は浅い皿形の面となる。表面に径1cmの大木炭痕が残る。色調は地が黒褐色、表面は暗褐色の酸化物に薄く覆われる。重さ226.2gを測る。



第26図 009号跡実測図・出土遺物

010号跡（第27図、図版6）

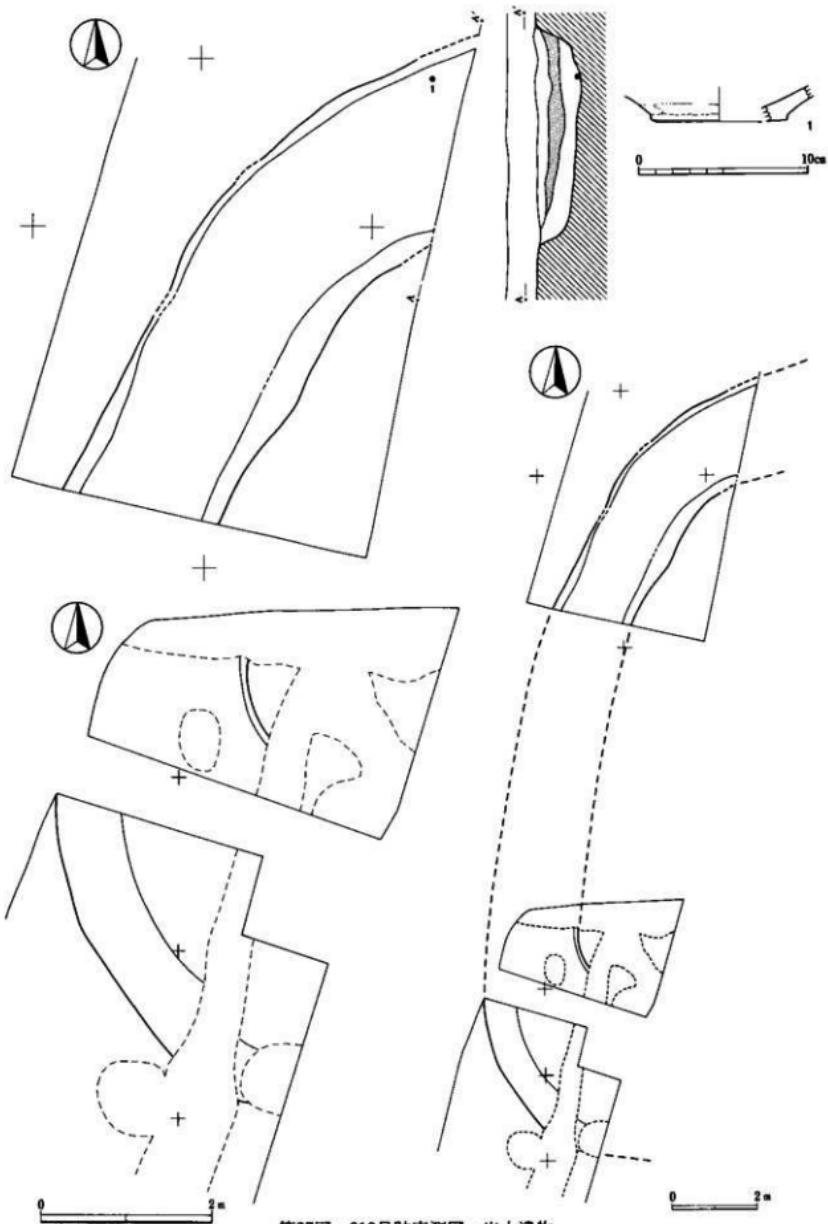
平成9年度調査範囲南端と平成11年度調査範囲北端で検出された溝状遺構である。調査範囲内の東側に向かって弧を描いている。古墳の周溝の可能性も考えられる。深さは20cm～46cmを測る。

本遺構からは、土師器の細片が出土しているが、図示できたのは、平成9年度調査範囲において出土した壺の底部のみである。

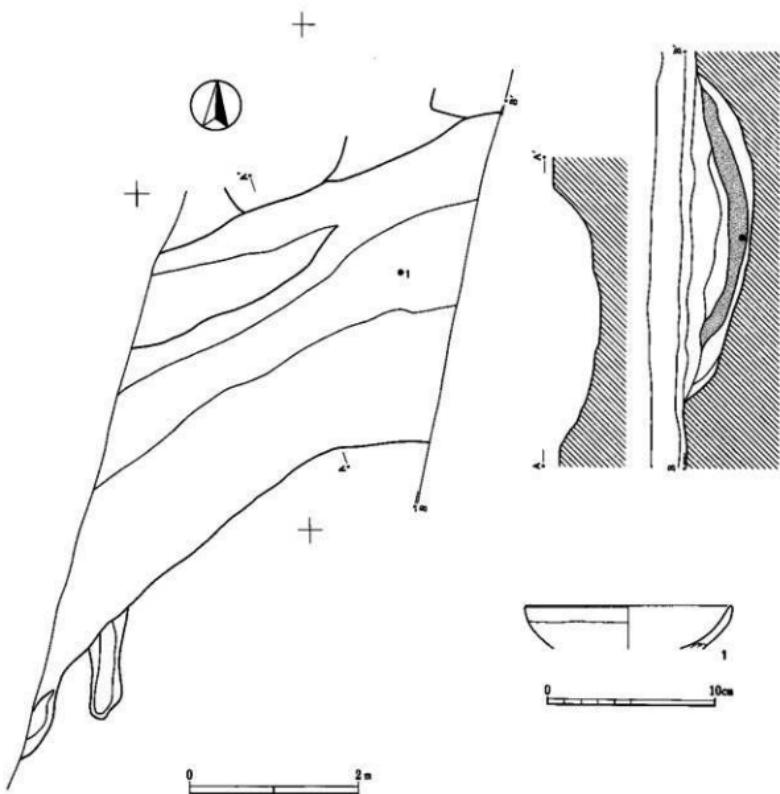
011号跡（第28図、図版6）

平成9年度調査範囲の南よりで検出された溝状遺構である。010号跡に沿うような状態で、その北側で検出されたものである。深さは31cm～45cmを測る。

本遺構からは、土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示できたのは、1点のみである。1は土師器の杯であるが、器面の磨滅が著しく、調整の詳細は不明である。



第27図 010号跡実測図・出土遺物



第28図 011号跡実測図・出土遺物

015号跡（第29図）

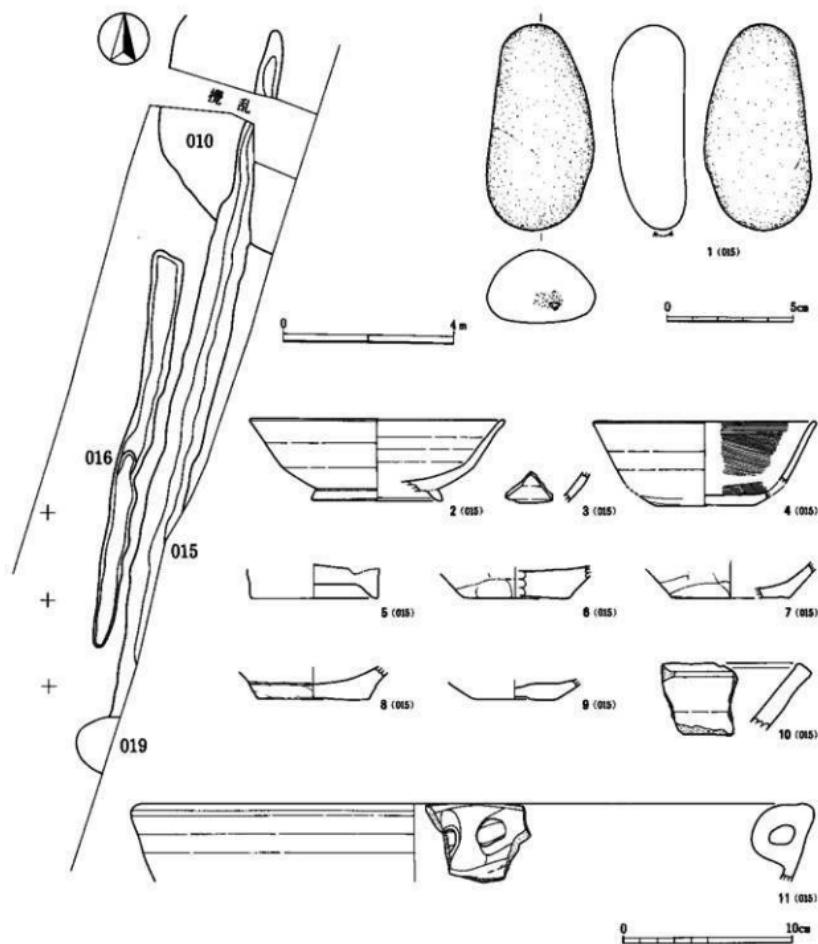
平成11年度調査範囲の南端で、010号跡の覆土上面を切って南北に走る溝状遺構である。深さは35cm前後を測る。

本遺構から出土した遺物は、敲石・緑釉陶器・土師器などが挙げられる。1は砂岩製の敲石である。平面長楕円形を呈する棒状の円礫下端に敲打痕が認められる。敲打痕の範囲はあまり広くなく、使用頻度は低い。重さ139.5gを測る。2・3は緑釉陶器の碗である。2は高台は貼付けで、釉色は淡黄緑色を呈し、軟質の焼成である。3は硬質の焼成で、釉色は淡緑色を呈する。4は内面黒色処理された杯である。底部は回転糸切り後周縁部が手持ちヘラ削りされる。5は高台付杯で、器面の遺存状態は悪いが、内面黒色処理されたものである可能性が強い。6～9は甕の底部で、6～8の外面はヘラ削りされ、9の外面はヘラナデされる。10は常滑窯製品の片口鉢である。11は焰烙で、内耳が付くものである。

016号跡（第29図）

平成11年度調査範囲の南端で、015号跡に沿うように、その西側を走る溝状遺構である。深さは5cmと非常に浅い。

本遺構からは、土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

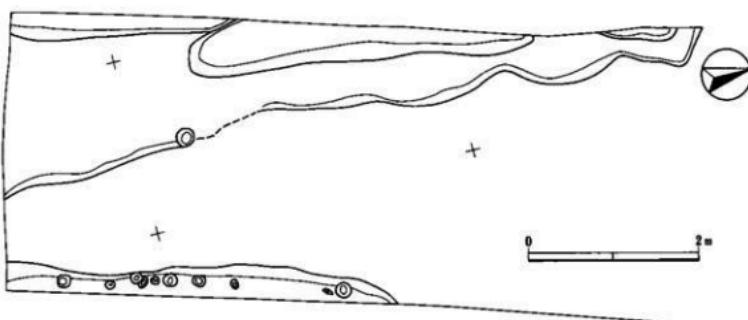


第29図 015・016号跡実測図・出土遺物

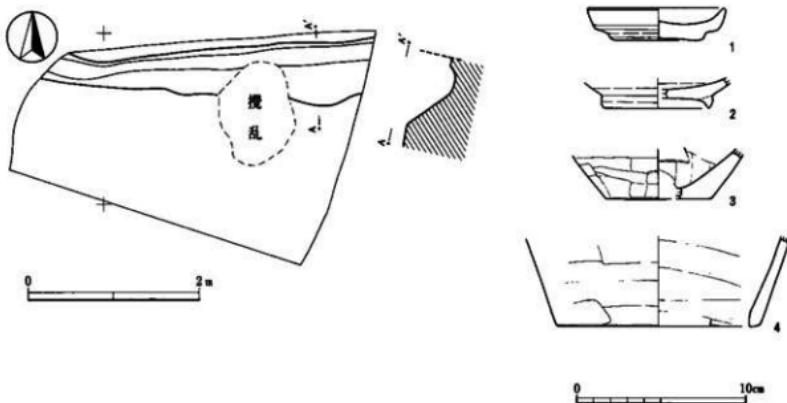
018号跡（第30図）

平成11年度調査範囲南端で検出された溝状遺構である。東よりのものは、溝底の縁に沿って小ピットが並んで確認された。西よりのものは2段以上の段差を持って西側に下がっていく。深さは東よりのものは、15cm～24cm、西よりのものは、6cm～8cmを測る。

本遺構からは、遺物は出土していない。



第30図 018号跡実測図



第31図 024号跡実測図・出土遺物

024号跡（第31図）

平成11年度調査範囲の北端で検出された東西に走る溝状遺構である。根岸神社の参道と考えられる。深さは5cm~44cmと大きく差があり、東に向かって傾斜している。

本遺構から出土した遺物には土師器、土師質土器、灰釉陶器などが挙げられる。1は土師質土器の小皿である。2は灰釉陶器の碗で、高台は三日月高台と呼ばれるものである。3は壺の底部で、内外面ともヘラ削りされる。4は瓶の胴部下半の破片である。内外面ともヘラ削りされる。

(4) 土坑と遺物

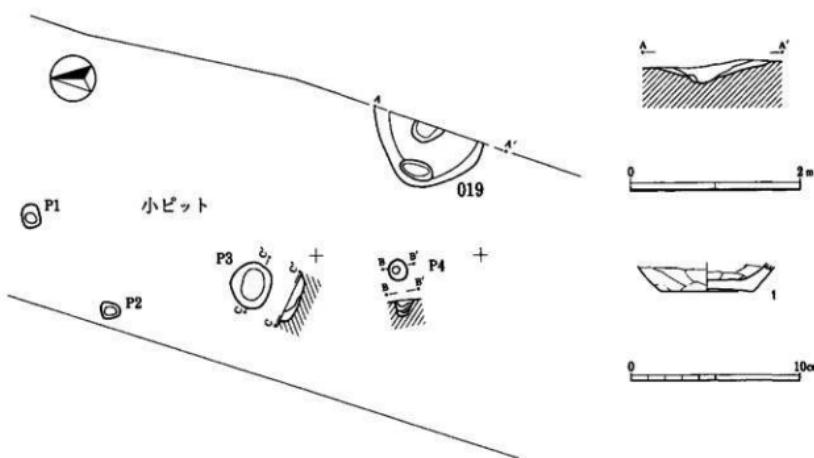
019号跡（第32図）

平成11年度調査範囲の南側で検出された土坑である。径約1.4mを測るものと思われるが、その大半が調査範囲の東側に及んでおり、詳細は不明である。

本遺構からは、土師器の細片が出土しているが、図示できるものはない。

小ピット（第32図）

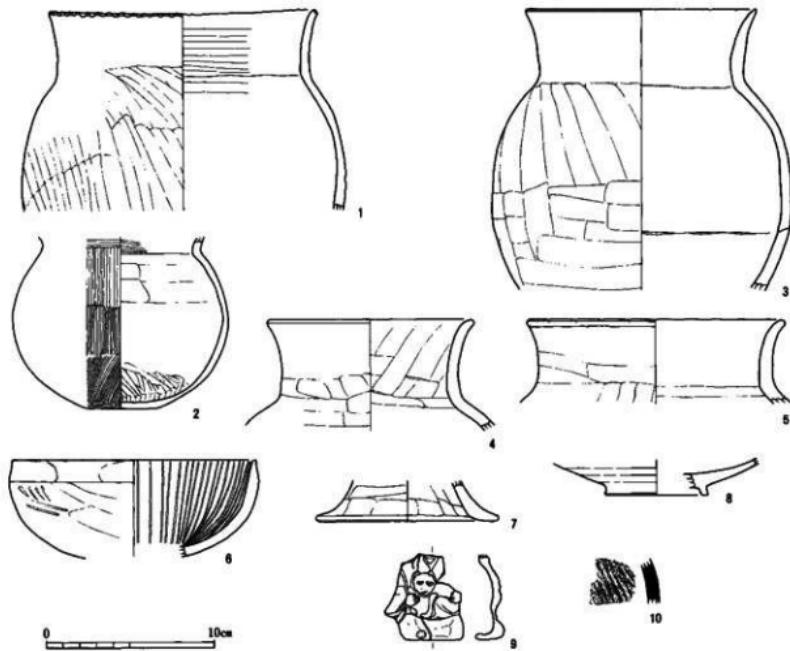
016号跡の西側で検出された4基の小ピットである。深さは13cm~23cmを測る。1はP1から出土した壺の底部破片で、内外面ともヘラ削りされる。



第32図 019号跡・小ピット実測図・出土遺物

(5) 遺構外出土土器 (第33図)

1は壺で、口唇部には押捺が加えられ、頸部以下はヘラナデされる。2は壺で、胴部外面は細かくヘラミガキされる。3～5は壺で、胴部外面はヘラ削りされ、口縁部はヨコナデされる。6は杯で、体部外面はヘラ削りされ、内面には放射状の暗文が認められる。7は高杯の脚部で、内外面共ヘラ削りされる。8は縦釉陶器の碗で、低い高台が貼り付けられる。9は土製人形で、頭部を欠失するが、猫を抱いた状態を表わしている。型作り成型である。10は第1図の×印の地点で表探した須恵器壺の破片である。外面にはタタキ目が認められる。



第33図 遺構外出土遺物

III まとめ

今回の調査では、道路拡幅部分という極めて限定された調査範囲であったため、遺跡の全容を解明することは困難であるが、古墳時代から平安時代に至る遺構・遺物、中世の遺物などが検出された。更に図示することは出来なかったが弥生時代後期と思われる土器が少量確認されており、弥生時代後期から中世に至る長期に渡った生活が営まれていたことは間違いない。その領域についても、今回調査した範囲の周辺において土器が採集されており（第1図×地点から第33図10の須恵器を表採した）、現集落全体を含む、小櫃川沿いの微高地の広い範囲に集落が形成されていた様子を看取することができる。

また今回の南北に長い調査範囲において、その北端と南端で、検出された遺構の性格が大きく異なっている。古墳時代においては、北側に堅穴住居跡などの生活に関する日常空間が広がり、40m程の空白帯を挟んで南側には、古墳のような非日常空間が広がっている。時代が新しくなると、南側部分には掘立柱建物跡が広がっている。今回検出された掘立柱建物跡は2棟であるが、両者は長軸が直角に交わるように配置されており。未調査区にも更なる遺構の存在が予想される。

本遺跡の西側には大竹遺跡群に見られるように、弥生時代中期からの生活痕跡が認められており、この集団を端緒として、小櫃川の周辺に広がる沖積地を耕作地とした農耕社会の形成を窺うことができる。この農耕社会は、その後丘陵上に数多くの古墳群を形成するほどの発展を見せ、これを基盤として古代・中世に至り、畦蒜荘のような莊園を登場させていったのであろう。

本遺跡は、弥生時代後期には人の行き交う場所であり、遅くとも古墳時代前期には丘陵上より生活領域を移し、ムラを形作っている。このムラが平安時代にまで続いていることはまず間違いかろう。更に、その位置から根岸神社の参道と思われる遺構（024号跡）の存在、羽口や鉄滓に見られる小鍛冶の存在からも、16世紀代にはかなりの賑わいを見せた集落へと成長している。小櫃川の対岸である横田郷の中心集落に並ぶような集落の存在を想定することは、あながち無理なことではなかろう。

なお、中世後期以降においては、本遺跡周辺に打越砦跡をはじめとして、笛子城跡や中尾城跡など戦国期の上総武田氏（真里谷氏）関連の城館跡等が多く見られる。今後の周辺調査で、これらに関連する遺構及び遺物の検出も十分に考えられる。

写 真 図 版



東京近郊農地航空写真(昭和11年撮影)



002号跡



003号跡



004号跡



004号跡



006号跡



008号跡





020·021·022·023号跡



001·007号跡



005号跡



009号跡



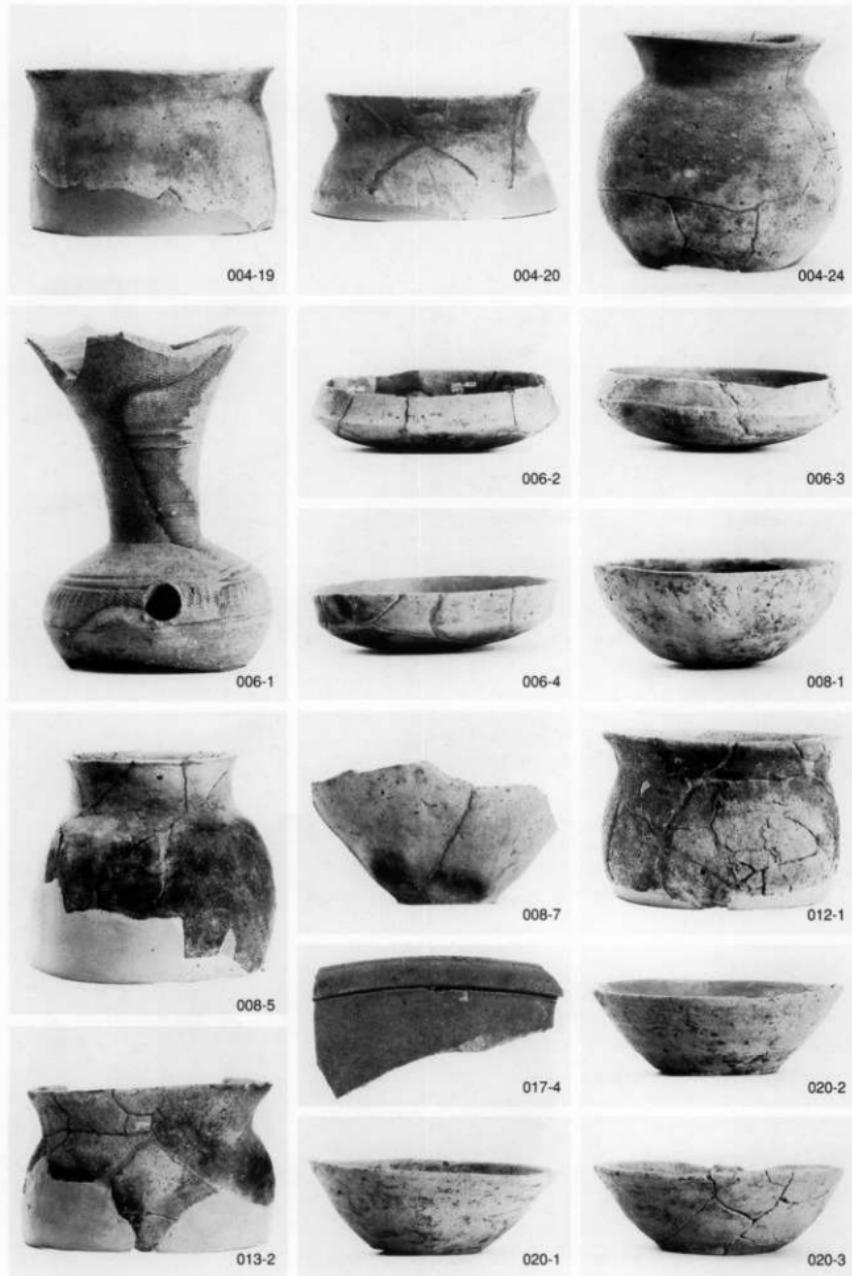
010号跡



011号跡



出土遺物（1）



出土遺物(2)



005-1

015-2

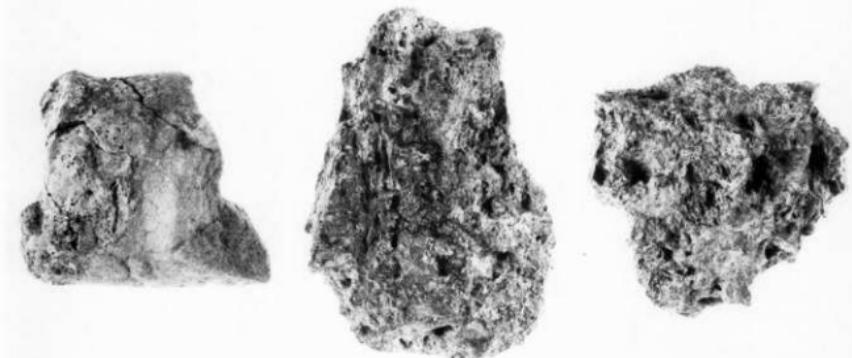
024-1



遺構外

008-8

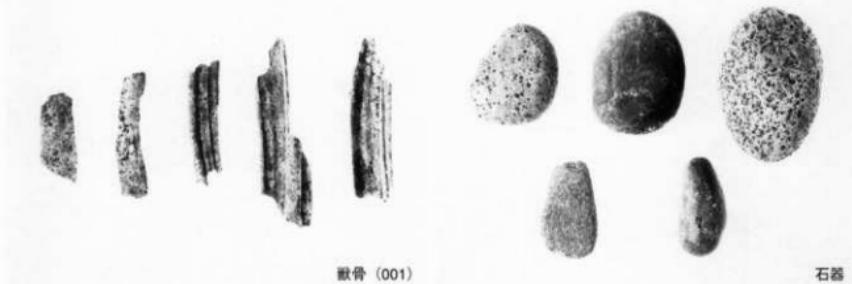
008-9



001-3

001-4

009



獣骨 (001)

石器

出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	そでがうらしねぎしねいせき							
書名	袖ヶ浦市根岸根遺跡							
副書名	一般県道長浦上総線県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第381集							
編著者名	豊田秀治							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL. 043-422-8811							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ 一 ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	道路番号					
根岸根	袖ヶ浦市下根岸 字川崎209-1ほか	12229	022	35度 22分 15秒	140度 02分 11秒	19970701～ 19970930 19990901～ 19990916	5,181 165	一般県道長 浦上総線県 単道路改良 事業に伴う 埋蔵文化財 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
根岸根	集落	古墳時代 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝状遺構	7軒 2棟 11条	土師器・須恵器 土師器・須恵器 灰釉陶器・綠釉陶器 製鉄関連遺物	小櫃川中流域南岸の、低 位段丘面に展開する。古 墳時代後期から中世にか けての集落跡である。		

千葉県文化財センター調査報告第381集

袖ヶ浦市根岸根遺跡

－一般県道長浦上総線県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書－

平成12年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県土木部

千葉市中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿波809-2

印 刷 大和美術印刷株式会社

木更津市潮浜2-1-10
